

杉谷4号墳

— 第2次発掘調査報告書 —

2015年2月

富山大学人文学部考古学研究室

二〇一五年二月

杉谷4号墳

— 第2次発掘調査報告書 —

2015年2月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷4号墳

— 第2次発掘調査報告書 —

2015年2月

富山大学人文学部考古学研究室

例　言

1. 本書は、富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）が、平成25（2013）年度に実施した、富山県富山市杉谷2630（富山大学杉谷キャンパス内）に所在する杉谷4号墳における第2次発掘調査の成果報告である。
2. 杉谷古墳群内の古墳名称は、遺跡台帳の登録では杉谷4号古墳となっているが、本書では杉谷4号墳とする。なお、1番塚古墳と2番塚古墳、3番塚古墳については、このまとめる。
3. 発掘調査は、富山市教育委員会の協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が中心となり実施した。
4. 本書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（1998年版）である。
5. 本書で用いた座標は、国土座標第VII系（世界測地系）に基づくものであり、南北をX軸、東西をY軸として示した。方位は真北、水平基準は海拔である。
6. 本文の執筆、出土遺物の実測、製図、写真図版作成は、次山淳（富山大学人文学部教授）、高橋浩二（富山大学人文学部准教授）、岡山充味、菅野友希、小林史佳、藤井奎臣、吉田皓（以上、富山大学人文学部学生）が担当して行った。分担は目次及び各項目の末尾に記すところである。
7. ただし、第2章及び第3章第1節の文章・図、第3章第2節の第8図は、富山大学人文学部考古学研究室2014『杉谷4号墳－第1次発掘調査報告書－』所載を再録したものである。
8. 写真撮影は、高橋が担当して行った。
9. 出土遺物、調査図面及び写真等は、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
10. 本書の作成にあたっては、安念幹倫氏、伊藤雅文氏、鈴木景二氏、高橋克壽氏、藤田富士夫氏、松井和幸氏、村田裕介氏、安中哲徳氏、富山市教育委員会の方々からご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
11. 本書の編集は、高橋が担当して行った。
12. 本書は、平成25～26年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の活動成果を含むものである。

杉谷4号墳 第2次発掘調査報告書

目 次

例 言

第1章 調査経過

- | | | |
|-------------|-----------|---|
| 1 調査に至る経緯 | 次山 淳 | 1 |
| 2 調査経過と調査組織 | 菅野友希・高橋浩二 | 3 |

第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡

小谷望有季・高橋浩二 6

第3章 研究史

- | | | |
|-------------------------|------|----|
| 1 富山市教育委員会による調査の成果 | 高橋浩二 | 12 |
| 2 富山大学考古学研究室による第1次調査の成果 | 高橋浩二 | 18 |

第4章 発掘調査の成果

- | | | |
|----------------|-----------|----|
| 1 測量基準点と調査区の設定 | 次山 淳 | 21 |
| 2 発掘調査の成果 | | |
| (1) 第1地区 | 吉田皓・高橋浩二 | 25 |
| (2) 第2地区 | 菅野友希・高橋浩二 | 29 |
| (3) 第3地区 | 藤井奎臣 | 31 |
| (4) 第4-1地区 | 小林史佳 | 33 |
| (5) 第4-2地区 | 藤井奎臣 | 35 |
| (6) 第4-3地区 | 小林史佳 | 36 |
| (7) 第4-4地区 | 小林史佳 | 36 |
| (8) 第5地区 | 岡山充味・高橋浩二 | 39 |

第5章 出土遺物

岡山充味・菅野友希・小林史佳・藤井奎臣・吉田皓・高橋浩二 42

第6章 まとめ

高橋浩二 46

図 版

抄 錄

図版目次

- 写真図版 1 1 第1地区・第2地区設定状況（北から）
 2 同上（北東から）
- 写真図版 2 3 調査区完掘状況（南西から）
 4 同上（東から）
- 写真図版 3 5 第1地区・第5地区完掘状況（北西から）
 6 同上（西から）
 7 第1地区北側の溝断面（南東から）
 8 第1地区溝状遺構断面（西から）
 9 同上（東から）
- 写真図版 4 10 第1地区完掘状況（南から）
 11 第2地区完掘状況（東から）
 12 第1地区・第2地区・第3地区完掘状況（南西から）
- 写真図版 5 13 第2地区A-A'断面（東から）
 14 第2地区北側断面（南東から）
 15 第2地区・第4-3地区完掘状況（西から）
 16 同上（東から）
 17 第4-3地区完掘状況（南から）
 18 第4-2地区完掘状況（東から）
- 写真図版 6 19 第4-1地区完掘状況（南から）
 20 第4-1地区北側断面第9層土器検出状況（南から）
 21 第4-1地区・第4-3地区・第4-4地区完掘状況（東から）
 22 第4-4地区完掘状況（南西から）
 23 第3地区完掘状況（北東から）
 24 第5地区完掘状況（北東から）
- 写真図版 7 25 第5地区溝状遺構（北東から）
 26 同上（東から）
 27 第5地区西側断面（東から）
 28 第5地区東側断面（西から）
 29 杉谷4号墳南側突出部周辺の状況（南東から）
- 写真図版 8 30 出土遺物

挿図目次

第1図 第2次発掘調査参加者	2
第2図 杉谷古墳群と杉谷A遺跡（古川1999を一部改変）〔寸田彩加 作成〕	7
第3図 杉谷4号墳と杉谷A遺跡 (富山市教育委員会1975を一部改変)〔寸田彩加 作成〕	7
第4図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡〔小谷望有季 作成〕	8
第5図 杉谷4号墳測量図及びトレンチ配置図 (富山市教育委員会1974に加筆)〔寸田彩加 作成〕	13
第6図 杉谷4号墳トレンチ断面図 (富山市教育委員会1974に加筆)〔寸田彩加 作成〕	14
第7図 杉谷4号墳出土土器（富山市教育委員会1974）	16
第8図 第1次調査における第1調査区・第2調査区平面図 (富山大学考古学研究室2014)〔金田朋子・小谷望有季 作成〕	19
第9図 第1次調査における主な出土遺物（富山大学考古学研究室2014より抜粋）	20
第10図 調査区基準杭配置図〔岡山充味 作成〕	22
第11図 調査区配置図〔岡山充味 作成〕	23～24
第12図 第1地区平面図・断面図〔吉田皓 作成〕	27～28
第13図 第2地区平面図・断面図〔菅野友希 作成〕	30
第14図 第3地区平面図・断面図〔藤井奎臣 作成〕	32
第15図 第4-1地区平面図・断面図〔小林史佳 作成〕	34
第16図 第2地区東側断面・第4-1地区東側断面合成図〔菅野友希 作成〕	34
第17図 第4-2地区平面図・断面図〔藤井奎臣 作成〕	35
第18図 第4-3地区平面図・断面図〔小林史佳 作成〕	37
第19図 第2地区A-A'断面・第4-3地区東側断面合成図〔菅野友希 作成〕	37
第20図 第4-4地区平面図・断面図〔小林史佳 作成〕	38
第21図 第5地区平面図・断面図〔岡山充味 作成〕	40
第22図 出土遺物〔岡山充味・菅野友希・小林史佳・藤井奎臣・吉田皓 作成〕	43
第23図 第1～5地区調査区平面図〔岡山充味 作成〕	47

表目次

第1表 第2次発掘調査の作業経過〔菅野友希 作成〕	5
第2表 調査区基準杭一覧〔岡山充味 作成〕	21

第1章 調査経過

1. 調査に至る経緯

標高 60～70m の杉谷丘陵は、富山平野を東西に二分する呉羽山丘陵の南西端に位置する。杉谷古墳群は、この丘陵上の三つの平坦面のうち南東部平坦面の南の縁辺にそって展開する 11 基からなる古墳群である。

この古墳群の内容が明らかになったのは、1974（昭和 49）年に富山市教育委員会が実施した確認調査の成果による⁽¹⁾。1 番塚古墳、2 番塚古墳、3 番塚古墳、4 号古墳、5 号古墳、6 号古墳、7 号古墳についてトレンチ調査がおこなわれ、墳形等の確認がなされた。とりわけ 4 号墳については、その墳形が山陰地方に特徴的な弥生墓制である「四隅突出型」とされたことから全国的にも大いに注目を集めた。

その後、杉谷丘陵には国立富山医科大学の新設計画が進められたが、古墳群そのものは学術的な価値からも建設予定地から除外されるとともに、県有地として保存されることとなった。

2004（平成 16）年の国立大学法人法施行を受けて、富山県内に所在する 3 国立大学（富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学）が統合され、翌年 10 月に新富山大学（富山医科薬科大学は医学部・薬学部、高岡短期大学は芸術文化学部）が発足した。この統合にともない、県有地であった古墳群の土地は富山大学に移管され、富山大学による所有・管理のもとで現在に至っている。

富山大学では、杉谷古墳群がキャンパス内に所在する貴重な歴史的遺産であるという認識から、学術研究の対象とすること、遺跡そのものを広く公開すること、地元の方々が取り組んだ杉谷古墳群顕彰事業⁽²⁾の熱意を受け継ぐこと、さらに古墳群の内容を明らかにするための新たな発掘調査の必要性などの観点から、現状の維持・管理ならびに文化財としての保存・活用についての検討が行われた。

一方、人文学部考古学研究室では、以前から富山県を中心とした「北陸地方における古墳出現過程の研究」を研究テーマのひとつとして取り組んできたことから、弥生時代墳墓との関連性を色濃くとどめる杉谷古墳群は、研究・教育の両面において好適なフィールドと考えられた。そこで、平成 21 年度に 3 カ年にわたる杉谷古墳群の発掘調査を計画し、関係機関との調整をおこなった。幸いにも地元の方々ならびに関係各位の理解と協力を得られるところとなり、調査の実施にいたることとなった⁽³⁾。

第 1 年次（平成 22 年度）および第 2 年次（平成 23 年度）は、杉谷 6 号墳を対象に測量調査およびトレンチによる墳丘の発掘調査を実施し⁽⁴⁾、第 3 年次（平成 24 年度）は対象を 4 号墳に移し、東側突出部の発掘調査（第 1 次）を実施した⁽⁵⁾。

3 カ年の調査終了を受けて、平成 25 年度には杉谷古墳群に対する調査継続の方針を確認し、あらたに 7 カ年の調査計画を策定した。計画は役員会において了承され、第 1 年次にあたる本年度は、南側突出部の実態の解明を目的に 4 号墳に対する第 2 次調査を実施することとした。

平成 25（2013）年 6 月 25 日付けで、文化財保護法第 92 条第 1 項の規定にもとづく埋蔵文化

財発掘調査届を富山市埋蔵文化財センター経由で富山県教育委員会に提出し、同年7月29日より調査を開始した。調査の終了は8月30日である。

現地での調査にあたっては、富山大学人文学部ならびに杉谷キャンパスの教職員の方々にさまざまなかたちでご配慮をいただいた。上記の各位、および地元の方々、関係各機関に対し併せてここに感謝の意を表する。なお、本調査は、平成25年度人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の配分を受けて実施したものである。 (次山 淳)

注

- (1) 富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
- (2) 「杉谷4号墳と四隅突出墳」出版事業編集委員会 2009『海を越えての交流—杉谷4号墳と四隅突出墳—』古沢校下ふるさとづくり推進協議会
- (3) 黒崎 直 2012「調査に至る経緯」『杉谷6号墳—第1次発掘調査報告書—』富山大学人文学部考古学研究室
- (4) 富山大学人文学部考古学研究室 2012『杉谷6号墳—第1次発掘調査報告書—』
富山大学人文学部考古学研究室 2013『杉谷6号墳—第2次発掘調査報告書—』
- (5) 富山大学人文学部考古学研究室 2014『杉谷4号墳—第1次発掘調査報告書—』

第1図 第2次発掘調査参加者



2. 調査経過と調査組織

調査期間は2013（平成25）年7月29日から同年8月30日である。杉谷4号墳の第2次調査では、四隅突出型墳丘墓南側突出部の形状と規模、及び周溝の有無の確認、そして築造時期を解明するための土器資料を得ることを主たる目的に発掘調査を実施した。調査経過は次の通りである。

初日の7月29日は、コンテナハウスの搬入後、設置を行った。

7月30日は、まず発掘機材の搬入を行った後、休憩所のテントを設置した。次に、トータルステーションを使用して、2011年度に設置した3級基準点及び4級基準点の確認を行った。並行して調査地区の除草作業を行った。その後、調査地区全体の発掘前写真撮影を行った。

7月31日は、まず廃土置場の設定を行った。次に、四隅突出型墳丘墓南側突出部が想定される箇所へ、全体がL字形をなすように、南北方向に第1地区、東西方向に第2地区を設定し、それぞれ発掘前写真撮影を行った後、順次発掘を開始した。第2地区においては、表土を除去した段階で、性格不明の集石を検出した。

8月2日は、第1地区では表土除去後の写真撮影を行った。その後、西側断面に沿ってサブトレーナーを設定し、発掘をすすめた。第2地区では、集石の簡易実測及び写真撮影を行った。また、第1地区から東へ0.5m、第2地区から南へ2.5mの箇所に第3地区を設定し、発掘を開始した。

8月3日は、第1地区では南側へ1.5m拡張し、写真撮影を行った後、発掘をすすめた。第2地区では北側断面に沿う形で、調査区西端から東側へ3.9mまでの範囲においてサブトレーナーを設定した。また、第3地区でも北側断面、南側断面、東側断面に沿ってサブトレーナーを設定し、発掘をすすめた。

8月4日は、第1地区では検出された溝の写真撮影を行った。第2地区では東側へ1.5m拡張した。また、第3地区では北側断面、南側断面、東側断面の断面図を作成した。

8月5日は、第2地区と第3地区の間に、新たに第4地区を設定した。合わせて、第1地区から東側へ0.5m、第3地区から南側へ2.5mの箇所に第5地区を設定し、写真撮影を行った後、発掘を開始した。第3地区では断面図の作成を引き続き行った。

8月6日は、第2地区の北側断面に沿って、調査区東半部にサブトレーナーを設定した。

8月8日は、第2地区において東側へ0.5m拡張し、発掘をすすめた。また、第4地区の東側へ新たに第4-2地区を設定した。これに伴い以後、第4地区は第4-1地区とした。第4-1地区では南側断面の断面図を作成した。

8月9日は、第1地区において溝下半部の写真撮影を行った。第4-1地区では北側断面、西側断面の断面図を作成した。また、第4-1地区から西側へ2.0mの箇所に第4-3地区を設定し、発掘を開始した。

8月10日は、第1地区において引き続き溝下半部の写真撮影を行った。その後、西側断面の断面図作成を行った。また、第4-2地区において検出された溝や地山の範囲を確認するため、東側へ1.0mの箇所に第4-4地区を設定し、その後調査区の形がL字形になるように南側断面に沿ってさらに2.3m拡張しながら、発掘をすすめた。第5地区では西壁断面の断面図を作成した。その後、調査区東部を南側へ1.0m拡張した。

8月11日からは8月25日にかけて、盆休みをはさんで、各調査地区において平面図及び断面図の作成を行った。

8月19日には、第5地区において平面の写真撮影を行った。

8月20日には、写真撮影用のローリングタワーを搬入した。8月25日にはローリングタワーを設置した。

8月26日からは8月28日にかけて、各調査地区において全体写真及び断面写真等の撮影を行った。その他、一部機材の洗浄を行った。

また、8月26日には、第4-3地区、第4-4地区において平面図及び断面図の修正作業を行った。

8月27日には、第5地区において断面図の修正作業を行った。

8月28日は、第5地区において第3地区との層位関係を確認するために、東側断面に沿ってサブトレンチを設定した。また、第5地区、第4-2地区、第4-3地区、第4-4地区において断面図の修正作業を行った。

8月29日は、第1地区、第5地区において平面図及び断面図の修正作業を行った後、写真撮影を行った。また、調査検出面の標示と遺構面の保護を目的として山砂を入れた後、作業が完了した地区から順次埋戻し作業を行った。全調査地区の埋戻し作業が完了した後は、埋戻し後の全体写真撮影を行った。

8月30日は、まず発掘機材の洗浄を行った。その後、発掘機材とコンテナハウスの搬出を行い、全作業が完了した。
(菅野友希)

調査にあたっては富山市教育委員会、古沢校下ふるさとづくり推進協議会々長、古沢校下自治振興会々長、杉谷地区自治会長、友坂地区々長ならびに地区の皆様に多大なご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。
(高橋浩二)

杉谷4号墳第1次発掘調査組織

調査主体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）

調査代表者：大工原ちなみ（富山大学人文学部長）

調査担当者：次山淳（富山大学人文学部教授）、高橋浩二（富山大学人文学部准教授）

調査参加者：盛田拳生、三好清超（以上、富山大学大学院人文科学研究科院生）

金田朋子、小谷望有季、清水俊輝、寸田彩加、山下大希、山場愛弓、岡山充味、
菅野友希、小林史佳、藤井奎臣、吉田皓、上野詩織、奥勇介、高見淳人、西脇悠生、矢野実沙希、山口七奈枝（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）
北岡さゆり、進藤久実、高橋佳穂莉、山中章太郎（以上、富山大学人文学部1年生）

第1表 第2次発掘調査の作業経過

	全体	第1地区	第2地区	第3地区	第4-1地区	第4-2地区	第4-3地区	第4-4地区	第5地区
7/29	コンテナハウス設置								
30	機材搬入、休憩所設置、基準点確認、除草作業、調査前写真撮影	発掘開始、集石検出							
31	隆土置場設置、発掘前写真撮影	発掘開始							
8/1 休み									
2	写真撮影、サブトレレンチ設定	集石の簡易実測、写真撮影	サブトレレンチ設定	発掘開始					
3	調査地区拡張、写真撮影	サブトレレンチ設定	調査地区拡張						
4	写真撮影	サブトレレンチ設定	サブトレレンチ設定	発掘開始					
5		調査地区拡張							
6									
7 休み									
8	写真撮影	断面図作成(南壁)	発掘開始						
9	写真撮影、断面図作成 (西壁)	断面図作成 (北・西壁)	発掘開始						
10	断面図作成	断面図作成	断面図作成						
11									
12									
13~17 盆休み									
18		断面図作成(東・西壁)	平面図作成	平面図作成	平面図作成	平面図作成	平面図作成	平面図作成	
19	平面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	
20	ローリングタワー搬入	平面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	
21 休み									
22		平面図作成							
23 休み									
24	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	
25	ローリングタワー設置	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	
26	写真撮影、機材洗浄	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	平面図・断面図作成	
27									
28	埋戻し後の全体写真撮影	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	
29									
30	機材洗浄、機材及びコンテナハウス搬出	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	平面図・断面図修正、埋戻し	

■は各作業期間を表す

第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡

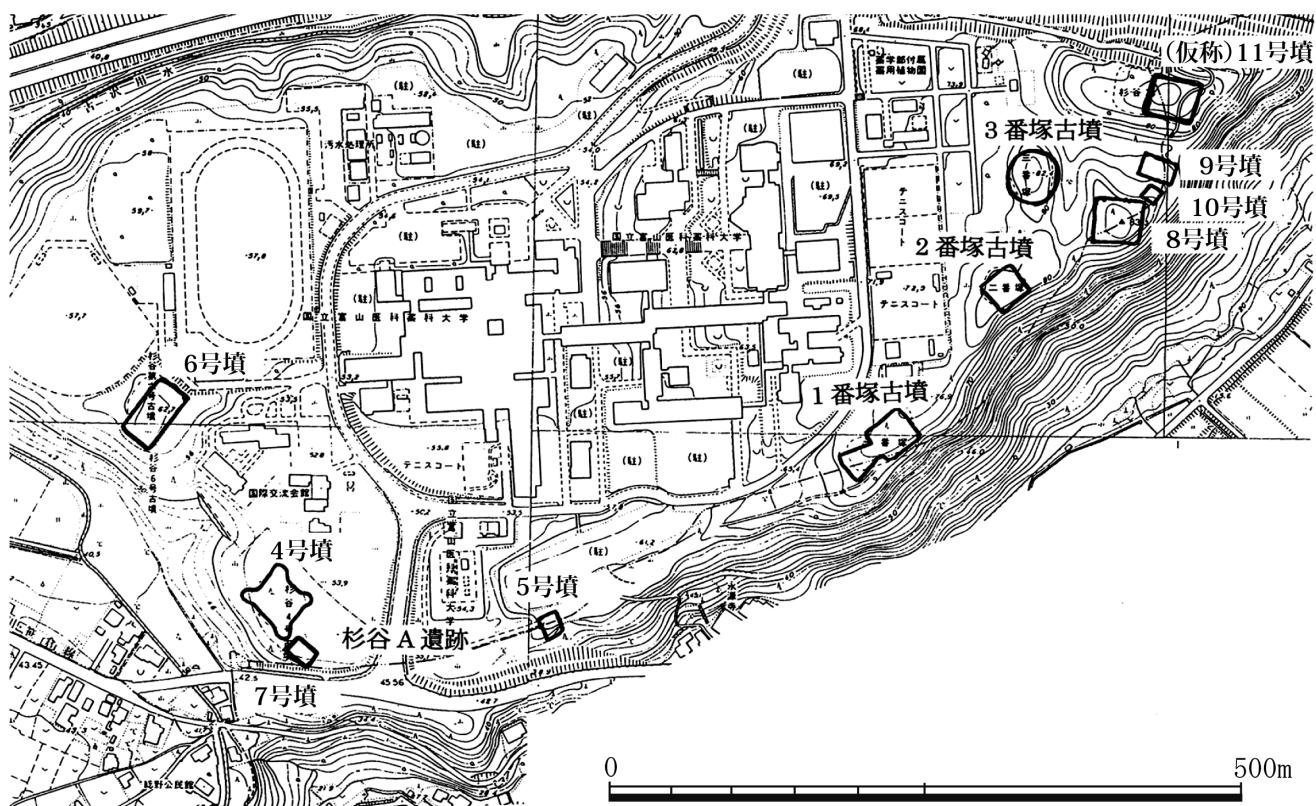
杉谷古墳群は、広大な富山平野を東西に二分するようにある呉羽丘陵に所在する。呉羽丘陵は南西から北東方向へ伸びる細長い独立丘陵で、全長は約7kmに及ぶ。富山県のほぼ中央に位置しており、ここを境にして東を「呉東」、西を「呉西」と今では呼び習わしている⁽¹⁾。呉羽丘陵は、富山市中心部に面する丘陵東側斜面が急崖をなし、麓には神通川とその支流の井田川が並行して流れる。射水市に面する丘陵西側斜面は所々にひらけた比較的緩やかな斜面の広がりが見られ、約10km西にある庄川との間に田園地帯が形成されている。

杉谷古墳群は、呉羽丘陵の南西端に発達した杉谷丘陵（友坂段丘）の、標高約50～70mの南西端部から南東端部にかけて立地する。ここからは富山平野を流れる神通川や井田川、また富山平野越しに立山連峰の山並みを望むことができる。富山湾からは約7km内陸へ入った所に位置する。富山大学医学・薬学部（旧富山医科薬科大学）の校地となってからは一帯に関連施設が建ち並び、古墳群のある場所はこれらの施設を取り巻く竹林及び緑樹帯となっている。大学の開設以前は、杉谷丘陵一帯には茶畠が営まれていた。

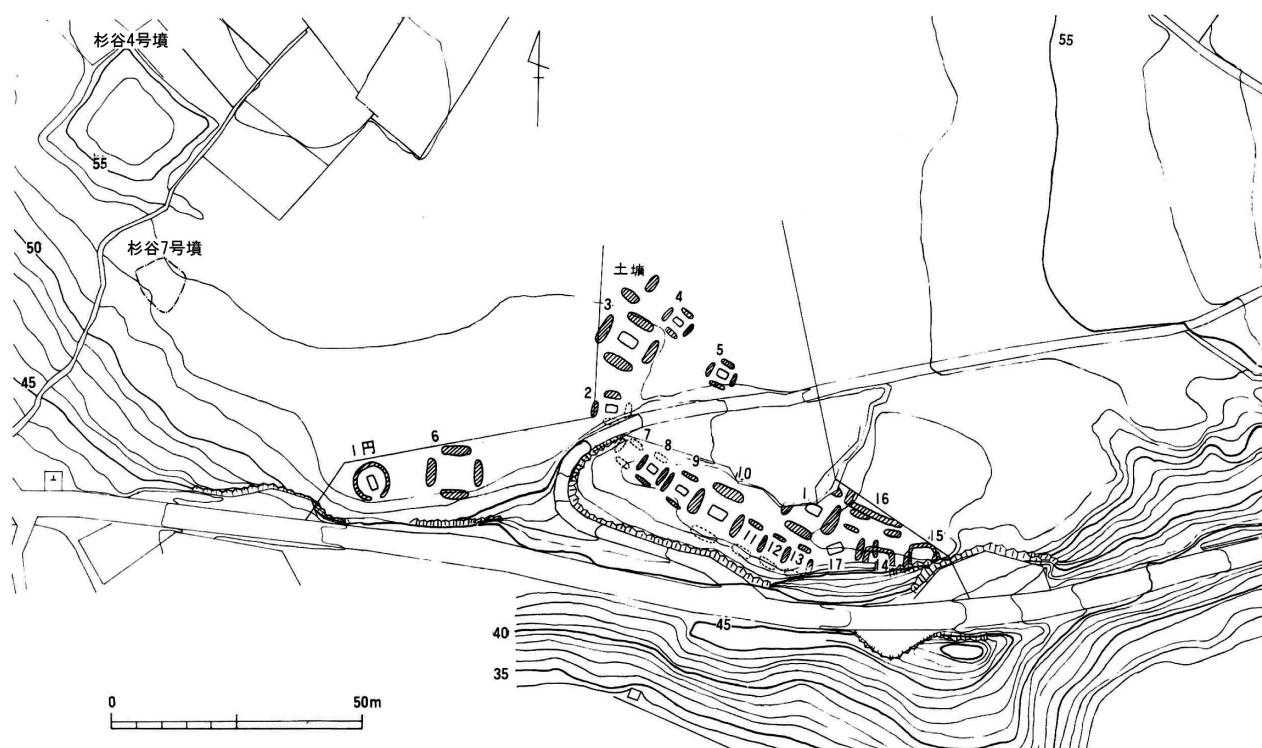
杉谷丘陵上で人々が活動をはじめたのは旧石器時代に遡る。現在は汚水処理所となっている場所の杉谷H遺跡からは旧石器時代のナイフ形石器1点とフレイク数点が出土している。縄文時代草創期の遺物としては、杉谷A遺跡から頁岩製石槍や杉谷遺跡から安山岩製有舌尖頭器が出土している。杉谷古墳群の北側を横断する北陸自動車道内の杉谷64番遺跡からは縄文時代早期から前期の押型文土器が出土している。杉谷遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡14棟、土坑6基、集石2基が弧状に並び、東向きに開口する環状集落が確認されている。また、内陸河川や富山湾での網漁をものがたる36点の石錘が出土している。杉谷G遺跡からは斜位の条痕文が施された縄文時代晩期の土器が出土している（富山市教育委員会1975・1976）。

弥生時代になると、後期までの遺跡はほとんど未確認だが、終末期頃から杉谷古墳群の築造が開始される。杉谷古墳群は四隅突出型墳丘墓1基（4号墳）と前方後方墳1基（1番塚古墳）、円墳1基（3番塚古墳）、長方墳（6号墳）1基、方墳6基、墳形不明1基の合計11基で構成される（富山市教育委員会1974a、富山大学人文学部考古学研究室2012・2013）。また、杉谷4号墳の南東約80mにある杉谷A遺跡からは、4号墳とほぼ同時期の方形周溝墓16基と円形周溝墓1基が発見され、1号墓（鉄鉈1点とガラス小玉）や2号墓（鉄素環頭刀1点とガラス小玉）、3号墓（鉄素環頭刀1点と鉄鉈片4点、ガラス小玉）、10号墓（銅鏡1点とガラス小玉）、17号墓（鉄劍1点とガラス小玉）などから副葬品が出土している。このほか、弥生時代終末期の月影式に比定される甕や広口壺、台付装飾壺、高杯、器台、鉢が出土している（富山市教育委員会1975）。なお、杉谷古墳群に対応する基盤集落は現時点では未確認である。

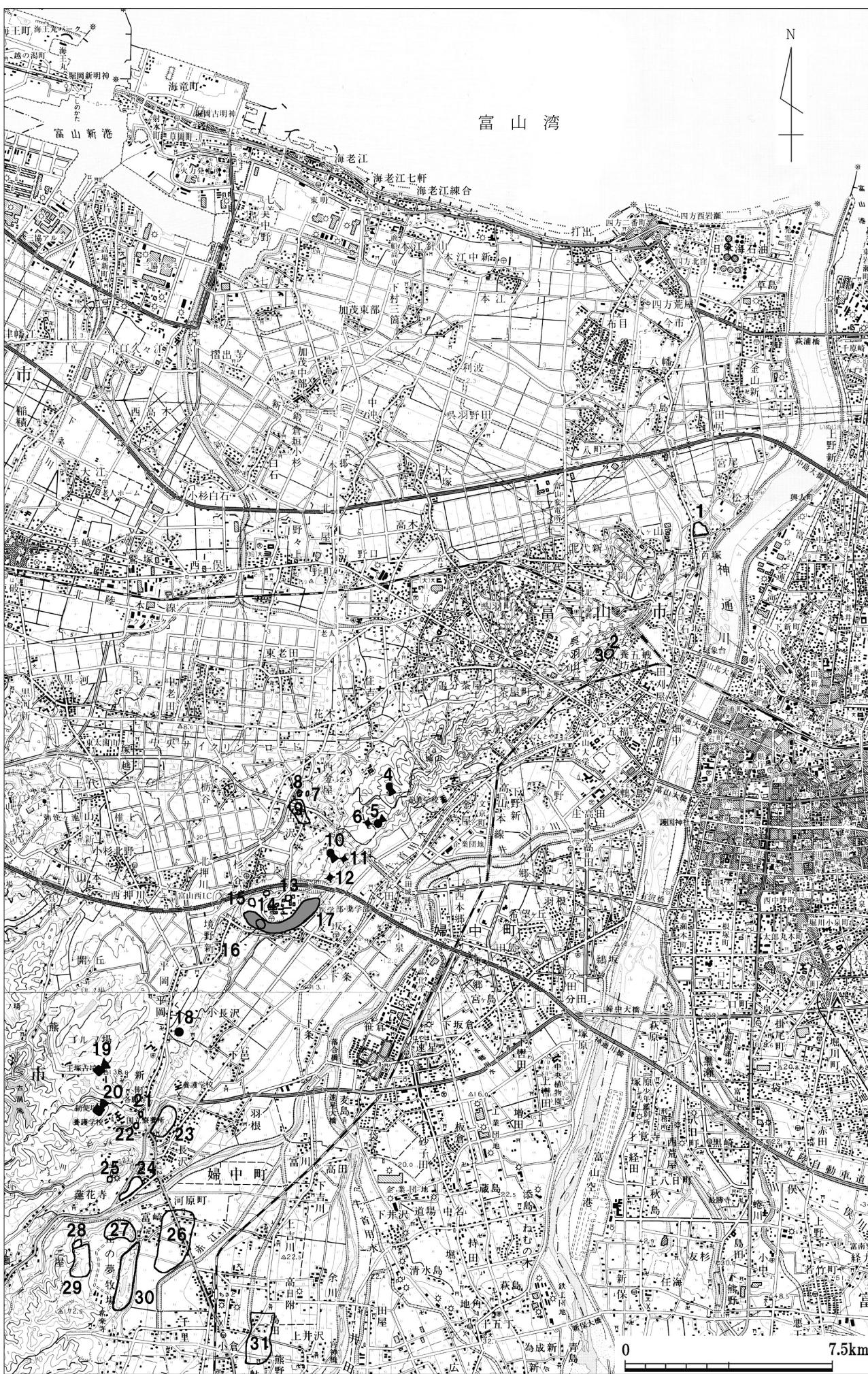
次に、呉羽丘陵の周辺に範囲を広げて、杉谷4号墳と同時期の墳墓や遺跡について概観する。井田川支流である山田川南岸の富崎丘陵北東端部に立地する富崎墳墓群は、3基の四隅突出型墳丘墓からなる。1号墓は一辺約21.7mの方形部に、長さ約6mの突出部が付く。2号墓は東西約17m以上、南北約15m以上の方形部に、南西側で長さ6.3mの突出部が付く。1号墓・2号墓ともに築造時期は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられている。3号墓は長さ22m、



第2図 杉谷古墳群と杉谷A遺跡（古川1999を一部改変）



第3図 杉谷4号墳と杉谷A遺跡（富山市教育委員会1975を一部改変）



第4図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡
(国土地理院5万分の1地形図「富山」「八尾」を改変)

幅 21m の方形部に、長さ 4m 以上の突出部が付く。築造時期は弥生時代後期後半に位置づけられ、富山県内では最も古い四隅突出型墳丘墓に比定される。富崎墳墓群の基盤集落としては、約 170m 東の丘陵麓にある富崎遺跡が考えられている。また、富崎墳墓群の西側には高地性集落と推測される富崎赤坂遺跡と離山砦遺跡が存在する（婦中町教育委員会 2002）。

山田川北岸の河岸段丘南端部には、2 基の四隅突出型墳丘墓からなる鏡坂墳墓群が所在する。1 号墓は一辺約 24.1m の方形部に、長さ 4m 以上の突出部が付く。2 号墓は一辺約 13.7m の方形部に、平均で長さ 3.75m の突出部が付く。築造時期はともに弥生時代終末期に位置づけられている。鏡坂墳墓群の基盤集落としては、約 250m 南東にある鍛冶町遺跡が考えられている（婦中町教育委員会 2002）。

山田川のさらに支流である辺呂川北岸の河岸段丘端部には、四隅突出型墳丘墓の六治古塚が立地する。一辺約 24.5m の方形部に、平均で長さ 7.2m の突出部が付く。築造時期は弥生時代終末期に位置づけられている。近接する向野塚は墳長約 25m の前方後方形周溝墓で、六治古塚に後続することが推定されている。約 350m 北東の下位段丘にある千坊山遺跡からはほぼ同時期の竪穴住居跡が 24 棟検出されており、六治古塚・向野塚の基盤集落と考えられている（婦中町教育委員会 2002、大野 2007）。

未発掘だが四隅突出型墳丘墓の可能性があるものとして、吳羽丘陵に立地する吳羽山丘陵 No.6 古墳、吳羽山丘陵 No.10 古墳、吳羽山丘陵 No.18 古墳が挙げられる。方形部隅角が外方に突出するなど、外形的に四隅突出型墳丘墓を思わせる要素を備えている（富山市教育委員会 1984）。

神通川下流西岸の吳羽丘陵北端には百塚遺跡が立地する。一帯からは弥生時代後期から古墳時代後期にかけての方形周溝墓 14 基、円形周溝墓 6 基、方墳 3 基、円墳 2 基、前方後方墳 2 基などが確認されている。方形周溝墓（SZ10）の埋葬施設から、県内では最多となるガラス小玉 110 点が出土している（富山市教育委員会 2012a）。

続いて、古墳時代前期・中期・後期の古墳と遺跡について順に概観する。まず、杉谷古墳群から約 2.5 km 南西には、墳長約 66m の前方後方墳である勅使塚古墳がある。前期前半段階の土器が出土しており、定型化した前方後円（方）墳としては県内で最も古い古墳の一つに挙げられる（富山県文化振興財団 2003 ほか）。ここから谷を挟んで約 0.4 km 北には、墳長約 58m の前方後方墳である王塚古墳がある。未発掘だが、墳丘形態などを根拠に、勅使塚古墳の次代の首長の古墳と判断される（高橋 2006・2007a）。富崎墳墓群の南に近接しては、前方後方墳 1 基、円墳 1 基、方墳 15 基の計 17 基からなる富崎千里古墳群が築かれる。古墳群の最高所に築かれた墳長約 34m の前方後方墳である 9 号墳は、出土土器から勅使塚古墳とほぼ同時期に比定されている。勅使塚古墳が単独墳で、約 2 倍の規模をもつことから鑑みると、富崎千里 9 号墳はより下位の首長の古墳と判断される（婦中町教育委員会 2002、高橋 2005）。これらの前期古墳と

第 4 図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡名

1. 百塚・百塚住吉遺跡
2. 吳羽山古墳
3. 番神山横穴墓群
4. 吳羽山丘陵 No. 26 古墳
5. 吳羽山丘陵 No. 16 古墳
6. 吳羽山丘陵 No. 18 古墳
7. 西金屋センガリ山窓跡
8. 古沢窓跡群
9. 古沢遺跡
10. 古沢塚山古墳
11. 吳羽山丘陵 No. 10 古墳
12. 吴羽山丘陵 No. 6 古墳
13. 杉谷 G 遺跡
14. 杉谷 H 遺跡
15. 杉谷 遺跡
16. 杉谷 A 遺跡
17. 杉谷古墳群
18. 二本榎古墳
19. 王塚古墳
20. 勅使塚古墳
21. 向野塚古墳
22. 六治古塚
23. 千坊山遺跡
24. 鍛冶町遺跡
25. 鏡坂墳墓群
26. 富崎遺跡
27. 富崎墳墓群
28. 離山砦遺跡
29. 富崎赤坂遺跡
30. 富崎千里古墳群
31. 南部 I 遺跡

の関連性が考えられる集落としては南部 I 遺跡がある。南部 I 遺跡からは弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡や土器が検出されている（婦中町教育委員会 2002）。杉谷古墳群から約 1 km 北東の呉羽丘陵には、墳長約 38m の前方後円墳である呉羽山丘陵 No.16 古墳がある。未発掘だが、前期古墳と推定されている（岸本 1992）。杉谷古墳群から約 5.5 km 北東の呉羽丘陵北端部には、百塚住吉遺跡がある。ここからは弥生時代後期後半から古墳時代前期の方形周溝墓や方墳、円墳とともに、墳長約 18.5m と約 14m の前方後方形周溝墓（前方後方墳）2 基と、墳長約 24m と約 21m の前方後円墳 2 基が検出されている。前方後円墳は 2 基とも墳裾部に溝を巡らす、周溝墓と共通したパターンのものであり、出土土器からも県内最古の前方後円墳と評価されている（富山市教育委員会 2009）。

中期古墳には、杉谷古墳群から約 0.5 km 北東の呉羽丘陵に所在する古沢塚山古墳がある。墳長約 41m の前方後円墳である。墳丘は、呉羽丘陵上の多くの古墳が丘陵東側に面するのに対して、丘陵西側に面して築かれている。また、墳丘主軸を呉羽丘陵の走向とは直交する北西－南東方向にとっており、多くの前方後円（方）墳が丘陵の走向に沿って概ね北東－南西方向へ向けているのとは、やや異質な様相である（高橋 2007b）。古墳時代中期の集落遺跡としては、呉羽丘陵の西麓に境野新遺跡や古沢 A 遺跡がある（富山市教育委員会 1974b・1983）。

後期古墳には、呉羽山丘陵 No.16 古墳に隣接する所に、墳長約 20m の前方後円墳である呉羽山丘陵 No.26 古墳が知られる。未発掘だが、前方部が大きく開く形態を根拠に、後期でも新しい時期の富山県最後の前方後円墳と評価されている（岸本 1992）。杉谷古墳群から約 3.8 km 北東には、長さ約 4.5m の両袖式の横穴式石室をもつ呉羽山古墳（墳形・規模不明）がかつて存在した。金銅装頭椎大刀 1 点のほか、金環、銀環、玉類、須恵器が出土している。無窓の鍔を伴うこの金銅装頭椎大刀は 6 世紀第Ⅲ四半期頃のものと考えられている（野垣 2005）。呉羽山古墳に近接する番神山横穴墓群は後期後半に造墓が開始され、7 世紀後葉まで存続する。つまり、呉羽山古墳と番神山横穴墓群は一時期並存しており、威信財的な頭椎大刀を有し、かつ墳丘を備えたであろう呉羽山古墳の下位に、番神山横穴墓の被葬者たちが従属するという関係が推測される（高橋 2007a）。井田川西岸の中位段丘には二本榎古墳がある。長径 14.2m、短径 13.8m の円墳で、長さ 5.8m の左片袖式の横穴式石室をもつ。鉄刀子、ガラス小玉、須恵器が出土しており、築造時期は 6 世紀後半～7 世紀前半に比定されている（富山市教育委員会 2012b）。

この他、呉羽丘陵には古代の須恵器窯が多数確認されている。7 世紀～8 世紀初頭には西金屋センガリ山窯跡がある。また、8 世紀に最盛期をむかえる古沢 1～5 号窯跡などが存在する。古沢窯跡群で表採された須恵器は杯身と杯蓋、皿などの食膳具の比率が高いことが指摘されている（富山大学人文学部考古学研究室 1989）。古沢窯跡群に近接する古沢遺跡からは、8 世紀後半の竪穴住居跡が確認されている（富山市教育委員会 1977）。

以上のように、杉谷丘陵から呉羽丘陵一帯にかけての地には数多くの遺跡や弥生墳墓、前方後円（方）墳を中心とした古墳が存在し、富山県における弥生時代から古墳時代への変遷を考える上で重要な地域の一つと考えられている。神通川より東には、比較的流れが緩やかで河川沿いに小平野が広がる白岩川流域に、20～46m の円墳群や、未発掘で実態不明の小規模な前方後円（方）墳が少数存在することを除いては、新潟県上越地方までの間に特筆される古墳は認められない。つまり、杉谷丘陵から呉羽丘陵一帯にかけての地は、日本海側における四隅突出

型墳丘墓の東限を示すだけでなく、前方後円（方）墳の東北日本海側への波及の一端を示す地域としてもきわめて重要と言える。

神通川支流の井田川、山田川、辺呂川流域を経営基盤として、それとともに神通川を介せば日本海や飛騨地方へ相互に通交できることが、この一帯の地域集団の安定や勢力の拡張に深く関係したものと推察される。

(小谷望有季・高橋浩二)

注

- (1) 吳東、吳西という呼称は昭和初期頃から普及したらしく、富山藩政初期（寛永期）には神通川を境にして二分されることがあった（廣瀬 2003）。

参考文献

- 大野英子 2007『日本の遺跡 18 王塚・千坊山遺跡群』同成社
岸本雅敏 1992「越中」『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
高橋浩二 2005「北陸の前方後方墳の概要」『前方後方墳とその周辺』第11回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料、東北・関東前方後円墳研究会
高橋浩二 2006「北陸の前方後方墳－柳田布尾山古墳の時期的評価をめぐって－」『石川考古学研究会々誌』第49号、石川考古学研究会
高橋浩二 2007a『富山の古墳－氷見・雨晴の首長と日本海－』日本海学研究叢書、富山県・日本海学推進機構
高橋浩二 2007b「富山市古沢塚山古墳の再測量とその評価」『富山大学人文学部紀要』第47号
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003『勅使塚・永代遺跡・安居窯群・中山遺跡発掘調査報告』
富山市教育委員会 1974a『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山市教育委員会 1974b『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1975『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1976『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1977『富山市古沢遺跡概要調査報告書』
富山市教育委員会 1983『富山市古沢 A 遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会 2008『富山市富崎遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012a『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012b『富山市二本榎遺跡確認調査報告書』
富山大学人文学部考古学研究室 1989『越中上末窯』
富山大学人文学部考古学研究室 2012『杉谷6号墳－第1次発掘調査報告書－』
富山大学人文学部考古学研究室 2013『杉谷6号墳－第2次発掘調査報告書－』
野垣好史 2005「富山県の頭椎大刀」『ふくおかの飛鳥時代を考える』ふくおか歴史文化フォーラム資料集、福岡町教育委員会・富山考古学会編
廣瀬 誠 2003『神通川と呉羽丘陵－ふるさとの風土－』桂書房
婦中町教育委員会 2000『南部I遺跡発掘報告書』II
婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
婦中町教育委員会 2003『南部I遺跡発掘調査報告書』III
古川知明 1999「杉谷古墳群」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム、富山考古学会
古沢校下ふるさとづくり推進協議会 2009『海を越えての交流－杉谷4号墳と四隅突出墳－』

第3章 研究史

1. 富山市教育委員会による調査の成果

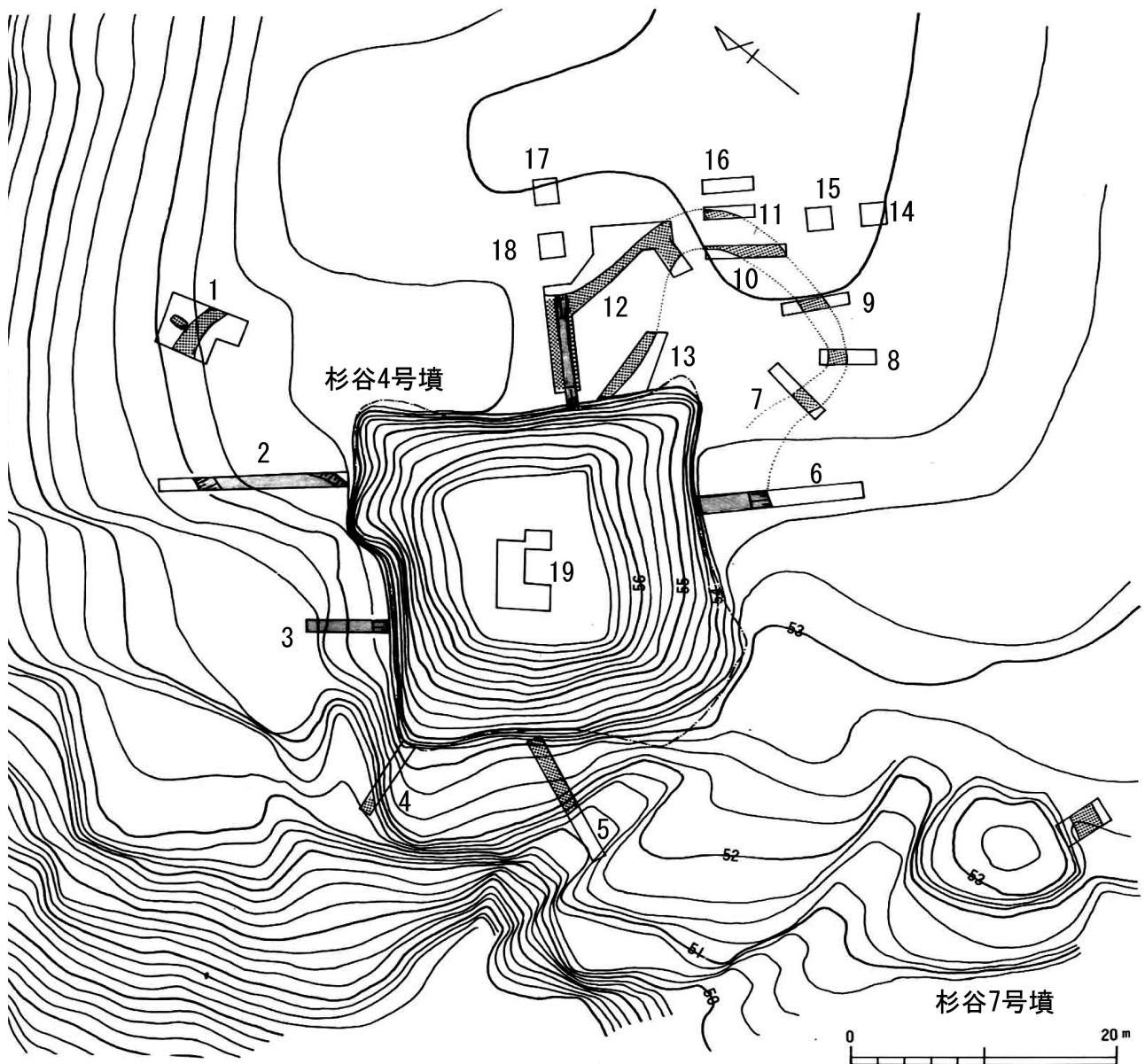
杉谷古墳群内の1番塚古墳と2番塚古墳、3番塚古墳、そして4号墳と5号墳、6号墳、7号墳については、富山市教育委員会によって1974（昭和49）年2～3月にかけて発掘調査が実施され、その概要が報告された（富山市教育委員会1974）。また、杉谷A遺跡の周溝墓群については、1974（昭和50）年9月～翌年1月にかけて発掘調査が実施され、概要が報告された（富山市教育委員会1975）。発掘調査は遺跡範囲と墳丘遺存状況の確認が主目的のトレンチ調査であったため、一部の遺構を除いてほとんどのトレンチは遺構面の検出に留められたが、さまざまな重要な知見がもたらされた。とりわけ、4号墳は調査当時、島根県以外で初めて発見された四隅突出型墳丘墓⁽¹⁾として全国的に注目を浴びた（富山市教育委員会1974、藤田1990）。

ここでは、富山市教育委員会が実施した4号墳の調査成果について、その概要をまとめる⁽²⁾。この調査では北側突出部に2箇所、西側突出部に1箇所、東側突出部に6箇所、東側突出部の外側に5箇所、東側突出部から北東側墳裾部にかけて1箇所、また北西側・南西側・南東側墳裾部および墳頂部にそれぞれ1箇所のトレンチが設定された（第5図）。なお、調査報告書には断面図が掲載された箇所についてはトレンチ名が記載されているが、それらを除くとトレンチ名が未記載のため、北側突出部を起点として反時計回りに便宜的に数字で名称をふった。

まず、現墳丘については「一辺が約25mの方形を基調」とし、「高さは3m余で全体に扁平な様相を示す」とされる。また、現墳丘の形状に関して「若干墳裾が内湾する」とし、このことを四隅突出型墳丘墓と考える根拠の一つに挙げている。第5図で、現墳丘の墳裾を表す一点破線や等高線をたどってみると、墳裾の内湾はとくに北東側・南東側において良好に観察されるようである。また、方形部の北側・東側稜線部裾がわずかに張り出す様相が見られる。一方、「北西部および南側コーナー部では後世の溝状加工等がありやや変形している」と指摘されるとおり、この箇所の墳裾部の等高線は大きく乱れている。この他、現墳丘については、「墳頂部は10～12mの平坦部を形成する」、「墳頂部直前で緩やかな段がみられる」との指摘がある。

第1トレンチは北側突出部の先端に設けられた長さ約4～6m、幅約4mのおよそL字形のトレンチである。突出部前面部を巡る幅の狭い溝が検出されている。また、突出部前面部のすぐ外側からは、「長径120cm、短径70cmの長円形状土壙」が検出されている。いずれも遺構面の検出に留められている。

第2トレンチは北側突出部の基部に設けられた長さ約14m、幅約1mのトレンチである。「幅11m、深さ1m20cm」の幅広の溝が、突出部側面を「外展」して巡る様相が確認されている。断面図（第6図）を見ると、周溝の断面形は底面が平らな逆台形を呈する。周溝内側斜面下半部（墳裾部）は緩やかに立ち上がるようである。土層は、まず墳丘側からKb層とKa層が堆積し、その上部にIX層が周溝外側斜面に至るまで比較的厚く堆積する。この上部には、墳丘側からはIXb層が、また周溝外側からは幾つもの土層が細かく流れ込み堆積するとともに、周溝中央部はVIIb層とVII層によって覆われる。そして、これらの上部を広く覆うように炭化物を含んだVI層や、III層が堆積する。墳丘側には焼土を含んだIIa層などの土層が細かく堆積する。

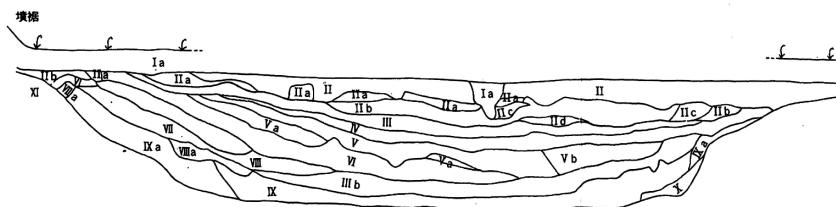


第5図 杉谷4号墳測量図及びトレンチ配置図（縮尺1/500、富山市教育委員会1974に加筆）

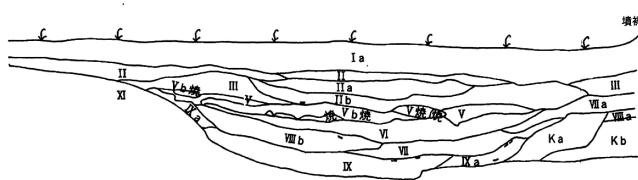
第3トレンチは北西側墳裾部に設けられた長さ約6m、幅約1mのトレンチである。同じく幅の広い周溝が確認されているが、トレンチが短いため、周溝外側斜面の状況は未詳である。周溝の断面形は底面が平らで、周溝中央部へ向かって緩やかに傾斜する。周溝内側斜面下半部（墳裾部）は比較的急傾斜で立ち上がるようである。土層は、まず墳裾部にKb層が流れ込み、その上にIX層が堆積する。この上部には、第2トレンチとは異なり、VIIIb層とVII層が墳丘側に堆積する。そして、これらの上部を覆ってVI層～II層が堆積する。溝の底面から高杯杯部が出土している（第7図-4）。

第4トレンチは西側突出部の基部に設けられた長さ約6m、幅約1mのトレンチである。トレンチ西端の標高51.250m～51.500mの等高線の間には、周溝部と同じ網かけが表現されているが、これについての具体的な記述はなされていない。

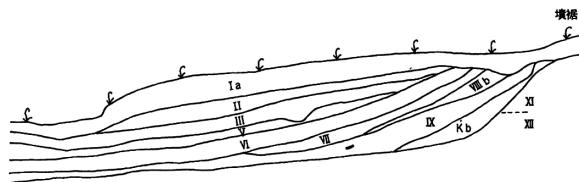
第5トレンチは南西側墳裾部に設けられた長さ約10m、幅約1mのトレンチである。トレン



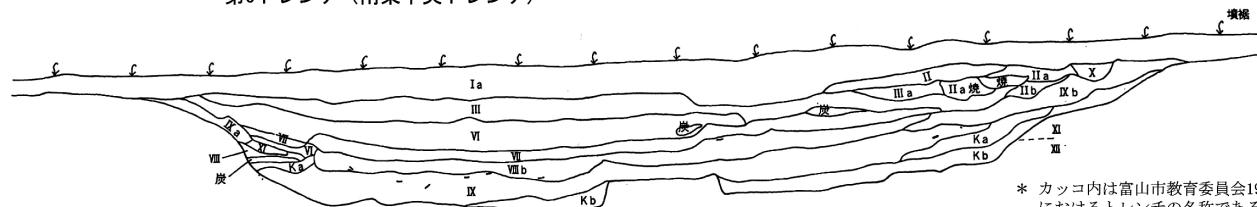
第12トレンチ（北東中央トレンチ）



第6トレンチ（南東中央トレンチ）



第3トレンチ（北西中央トレンチ）



第2トレンチ（北コーナー部トレンチ）

* カッコ内は富山市教育委員会1974
におけるトレンチの名称である



層 位

I a	褐色耕作土
II	黒褐色土 (柔かい)
II a	" (ややしまりあり・黄色粒子若干含む)
II b	" (II aよりやや柔かい)
II c	" (II bよりやや黒系)
II d	" (黒系・柔かい)
III	褐色土 (黄色粒子しもぶり状に多く含む)
III a	" (IIIより黒系・柔かい)
IV	褐色土 (黄色粒子若干含む・しまり最強)
V	黒褐色土 (黄色粒子若干含む・柔かい)
V a	" (Vより柔かく黒系)
V b	" (細粒子・しまりあり・褐色系)
VI	黒色土 (地山粒子をしもぶり混入・炭化物含・柔かくパサパサ)
VII	黄褐色土 (地山粒子をしもぶり混入・粘性強くしまりあり)
VII a	" (VIIよりしまりあり)
VII b	" (黒系・細密)
VIII	褐色土 (スコリア状地山粒子多く含む・柔かくパサパサ)
VIII a	" (VIII中で最も黒系)
VIII b	" (ややしまりあり・黒系)
IX	黒色土 (炭化物・スコリア状地山粒子多く含む・柔かくパサパサ)
IX a	" (やや褐色系)
IX b	" (IX aより細密)
X	黄褐色土 (地山再堆積・柔かくパサパサ)
X a	" (スコリア状地山粒子混入)
XI	黄褐色土
XII	地山土
	黄色シルト
	基盤
Ka	黒褐色土 (黄色スコリア・炭化物を最も多く含み柔かくパサパサ)
Kb	" (Kaより褐色系・黄色スコリアを多く含む)
焼	焼土
炭	炭化物

(数字にアルファベットつくものは全て亜種で、註記は基本層を基準にする)

第6図 杉谷4号墳トレンチ断面図（縮尺1/80、富山市教育委員会1974に加筆）

チ北半部の標高 51.500m～52.500m の等高線の間には、やはり周溝部と同じ網かけが表現されているが、これについても具体的な記述はなされていない。トレンチ南半部には南側突出部へ向けて続く「後世の溝状加工」が及んでいる。

第 6 トレンチ⁽³⁾ は南東側墳裾部に設けられた長さ約 12m、幅約 1m のトレンチである。「幅 5 m、深さ 1m10 cm」の幅の広い周溝が確認されている。周溝の断面形は底面が平らである。周溝外側斜面下半部は緩やかに立ち上がるようである。土層は、周溝中央部側から周溝内側斜面下半部にかけて Kb 層や Ka 層などが堆積し、周溝外側斜面側には IX 層や IXa 層、 VIIIb 層などが流れ込んで堆積する。この上面から中層までは VI 層が広く覆う。この上部には焼土を含んだ V 層や Vb 層が堆積する。報告書では「中層に焼土層が存在し、平安時代須恵器がこれを中心に上下の層より出土した」ことが報告されている。上層には同様に III 層と II 層が見られる。

第 7～11 トレンチは東側突出部の側面から前面部に設けられた長さ約 4～6m、幅約 1m のトレンチである。北側突出部と同様に、突出部前面部を巡る幅の狭い溝が検出されている。調査の結果、東側突出部は現況の「墳丘コーナーより約 12m 突出」することが確認された。なお、周溝の掘削は行われておらず、遺構面の検出に留められている。

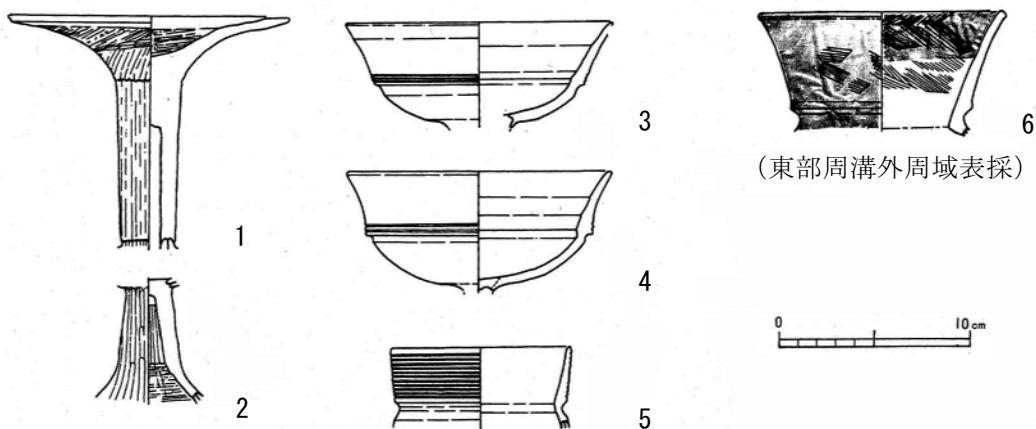
第 12 トレンチは東側突出部隅角部の箇所と北東側墳裾部の箇所（長さ約 9m、幅約 1.8m）とが連結されたトレンチである。突出部隅角部から北東側墳裾部にかけて徐々に幅が広がって巡る溝が検出されている。北東側墳裾部の箇所にはサブトレンチが設けられ、周溝が「幅 7m50 cm、深さ 1m30 cm」であることが確認された。周溝の断面形は底面が平らな逆台形を呈する。周溝斜面は、墳丘側は緩やかにカーブして立ち上がるが、反対側は立ち上がりが急傾斜となるようである。土層は、まず墳丘側から IXa 層が、また周溝外側から X 層と IXa 層が流れ込んだ後、その間に IX 層と IIIb 層が堆積する。第 2・3・6 トレンチと異なり、周溝の底面には Ka 層や Kb 層は見られない。IX 層・IIIb 層の上には、墳丘側から VII 層や VII 層、 VI 層、 Va 層、 V 層が堆積する。この上部には周溝中央部から周溝外壁にかけて IV 層と III 層などが見られ、最上層には II 層が堆積する。

第 13 トレンチは東側突出部の基部に設けられた長さ約 4.5～5m、上辺幅約 1.5m、下辺幅約 5.5m の台形のトレンチである。突出部先端へ向けて周溝が外反して広がる様子が検出されている。周溝の掘削は行われておらず、遺構面の検出に留められている。

第 14～18 トレンチは東側突出部の外側に設けられたトレンチである。第 14・15・17・18 トレンチは一辺約 1.8m、第 16 トレンチは長さ約 4m、幅約 1m である。いずれも遺構等に関する具体的な記述は見られない。

第 19 トレンチは墳頂部の中央部に設けられた長さ約 5～6m、幅約 4m のおよそコ字形のトレンチである。約 20 cm の表土を除去すると、「地山土や黒色土の斑文をもつ盛土」が検出された。また、この面において、トレンチのほぼ中央から「長さ 260 cm × 130 cm の長楕円形」の掘形が検出された。掘形の上面には「特に 25 cm 大の標示石 (?) とも思われる礫」が 1 点見られ、それを中心にして高杯脚部、高杯杯部、そして壺または甌の口縁部から頸部など 4 点の土器が出土した（第 7 図-1～3・5）。掘形は「便宜的なものだが、他に比べやや黒ずんでおり」、また「土器の出土や標示石の存在から土壙ともみれる」と説明されている。

上記のように、富山市教育委員会の調査によって北側・東側突出部と周溝、および北西側・



第7図 杉谷4号墳出土土器（縮尺1/4、富山市教育委員会1974）

南東側・北東側墳裾部における周溝の存在が確認された結果、「北東部での周溝を含めた一辺の長さは47~48mを測る」四隅突出型墳丘墓であることが明らかにされた。突出部の形状と規模に関しては、東側突出部は第5図の周溝上端を表す復元ライン（点線）でみると、基部から先端部にかけて外反しながら大きく広がる撥形の形状を呈し、現墳裾からの長さは約10.5mで、先端部のもっとも広がった箇所の幅は約13.5mとなる（筆者測）。また、突出部前面部では周溝の幅が狭くなるが、溝は途切れずに巡っていることが明らかにされた。同様に、北側突出部でも前面部には幅の狭い溝が巡ることが指摘されている。なお、突出部前面部の様相から、周溝は「1m20cm前後、深さ70cm余で四周連係するものと思われる」と記述されているが、南側突出部の箇所については、トレーンチは入れられておらず、未解明である。この他、墳丘に関しては、「貼石は存在しない」ことが指摘されている。

築造時期に関しては、出土土器は「大局的には北陸土師器第1様式（吉岡1967）に比定」されるものであり、また当時島根県下でのみ発見されていた四隅突出型墳丘墓が「古墳時代初期の在地型古墳の典型として把握されている（前島1972・東森1973）」ことからも、「時期的にも同種のものとできる」と結論づけられた。北陸土師器第1様式は、その後の研究で石川県加賀における月影式と並行すること（橋本1975）、そして月影式は月影I式とII式とに区分されること（谷内尾1983）、さらに月影II式の新しい段階は外来系土器が流入しはじめる白江式に分離されることが明らかにされた（田嶋1986）。月影式は畿内の庄内式に並行し、弥生時代終末期の土器とする研究者が多いが、白江式は庄内式後半期に比定され、古墳時代初頭の土器と評価する研究者も見られる。したがって、杉谷4号墳に関しては弥生時代終末期に築かれた四隅突出型墳丘墓とする考え方と、古墳時代初頭まで残存する四隅突出形の古墳とする考え方が並立しており、その評価は研究者間で分かれている⁽⁴⁾。

以上のように、杉谷4号墳は島根県とその周辺に特徴的な四隅突出型墳丘墓であり、それとともに同時期に比定される杉谷A遺跡の各周溝墓と比べて格段に大形であることが明らかにされた。しかしながら、東側突出部は撥形に大きく広がる平面形が検出されたものの遺構検出面での確認に留まるものであり、墳裾における規模や形状などが明らかにされたわけではない。同じく北側突出部についても部分的な確認に留まる。南側・西側の突出部については、その存

否すら明らかではない。墳裾を基準とした墳丘規模や墳丘盛土構造、また周溝が全周するのかなどについても未詳である。さらに、墳頂部等から出土した土器は少数で、完形に復元できる個体もなく、確実な築造時期を判断するまでには至っていない。したがって、突出部の規模や形態、また墳丘規模や盛土構造、周溝の様相等についてさらなる解明を目指すとともに、築造時期を絞り込む資料を得ることが最重要の課題と言えるだろう。そしてこれらの成果を踏まえて、北陸への四隅突出型墳丘墓の伝播過程や、富山平野における弥生墳丘墓から古墳への変遷過程を再検討することが求められている。⁽⁵⁾

(高橋浩二)

注

- (1) 富山市教育委員会 1974 では、「四隅突出形古墳」と表記されている。
- (2) 杉谷古墳群内の他の古墳及び杉谷 A 遺跡の調査成果は、高橋 2012 でふれているので参照されたい。
- (3) 調査報告書では断面図に「南西中央トレンチ」と書かれているが、これは「南東中央トレンチ」の誤りであり、また断面図の表土上にある「墳裾」の表記も本来は右端に書かかるべきものであることを、富山市教育委員会を通じて調査担当者の藤田富士夫氏からご教示いただいた。これらを修正した上で第 6 図を掲載した。記して感謝申し上げます。
- (4) 調査担当者の藤田氏は、杉谷 4 号墳を古墳時代の古墳と位置付けている。
- (5) 杉谷 4 号墳については、以前にその評価を述べたがあるので参考されたい (高橋 2009)。

参考文献

- 高橋浩二 2009 「北陸における弥生墓制」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
高橋浩二 2012 「研究史」『杉谷 6 号墳—第 1 次発掘調査報告書—』富山大学人文学部考古学研究室
田嶋明人 1986 「考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡』 I 、石川県立埋蔵文化財センター
富山市教育委員会 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山市教育委員会 1975 『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』
藤田富士夫 1990 『古代の日本海文化』中公新書
橋本澄夫 1975 「弥生土器—中部 北陸 4—」『考古学ジャーナル』No.111、ニュー・サイエンス社
谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』
吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』No.6、ニュー・サイエンス社

2. 富山大学考古学研究室による第1次調査の成果

第1次調査（2012年7月30日～8月31日）では、四隅突出型墳丘墓の東側突出部及び周溝の形状と規模の確認を目的として、東側突出部先端部の北半部に一辺10mの正方形の調査区を設定した（幅1mの中央アゼをはさんで東側を第1調査区、西側を第2調査区とする、第8図参照）。明らかになった成果は次の通りである。

1. 第1調査区と第2調査区において、東側突出部先端部の北半部における墳裾及び周溝を検出した。周溝内側斜面の下端を墳裾とすると、墳裾は第1調査区では標高53.000mの等高線に沿ってわずかに弧を描きながら巡る。第2調査区では52.000～52.750mの等高線の間に墳裾が構築されている。突出部先端部の形状は、富山市教育委員会1974では突出部側面から突出部前面にかけて隅角部が丸くカーブして描かれているが（13頁第5図）、第1次調査において隅角部は直角に近い角度で曲折することが明らかにされた。

2. 東側突出部の長さに関しては、現方形部隅角墳裾から測ると約10.5mである。突出部基部を第5図の方形部北東側墳裾線及び方形部南東側墳裾線にとってこの箇所から測ると、突出部の長さは約14～15mと推定される。また、東側突出部の幅に関しては、今回の調査で約8m分を確認したが、これを再び第5図にあてはめると先端部の最も広がった箇所の幅は約14～15.5mになることが推定された。

3. 突出部上に盛土は遺存しておらず、その存否を確認するには至らなかった。

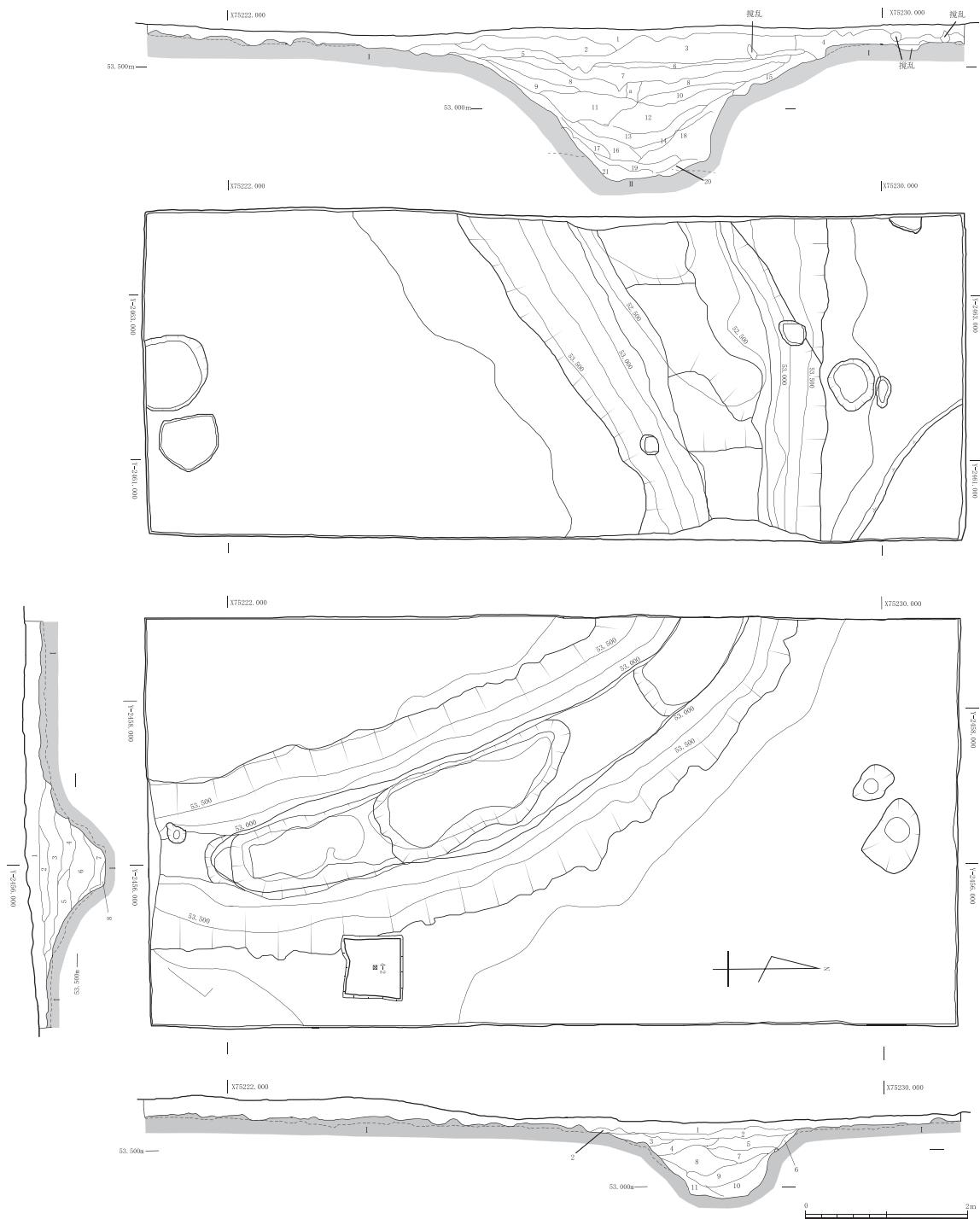
4. 周溝の幅と深さは、第1調査区南側断面で幅約2.0m、深さ約0.8m、西側断面で幅約2.6m、深さ約0.85m、第2調査区東側断面で幅約2.2m、深さ約1.07m、西側断面で幅約4.5m、深さ約1.54mである。このように、突出部前面部の中央に位置する第1調査区南側断面の周溝が幅狭くて浅く、突出部基部側に位置する第2調査区西側断面の周溝が幅広くて深くなっている。周溝最深部の標高も第1調査区南側断面で53.150m、西側断面で52.889m、第2調査区東側断面で52.738m、西側断面で52.158mというように、突出部基部側に近づくほど深くなる。ちなみに、第2調査区西側断面の周溝最深箇所から現墳丘最高地点までの高さは、約4.8mである。

5. 周溝底面は第1調査区の南側断面から西側断面、そして第2調査区東側断面までは階段状に緩やかに傾斜するが、第2調査区東側断面の西1mの地点からは西側断面へ向かって急傾斜で下降している。

6. 第1調査区、第2調査区からは合わせて約700点の土器片が出土した。そのほとんどは周溝内から出土したものであるが、周溝底部や下半部からの出土数は少なく、周溝上半部の、とりわけ墳丘側から偏って検出された。このことから、周溝が中ほど程度まで埋没した後に、主に墳丘側から土器片が多数流入したものと判断した。また、離れた地点における土器片の接合例が比較的多く認められており、原位置を離れて土器が流入していることを裏付ける結果と評価した。

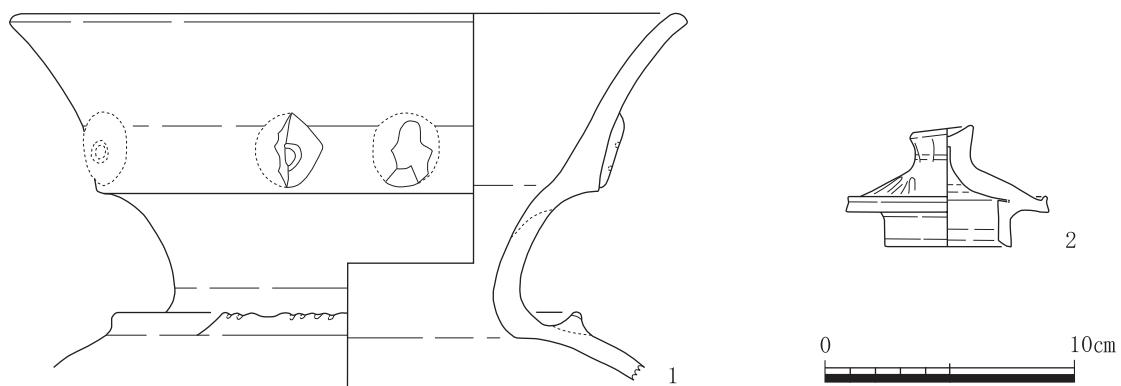
7. 杉谷4号墳の築造時期を推定させる土器資料としては、大形壺と返し付蓋がある（20頁第9図）。これらは弥生時代終末期または古墳時代前期初頭に比定される月影式から白江式に属するものである。

8. 杉谷4号墳の調査は、北陸の四隅突出型墳丘墓、また北陸最大級の弥生時代墳墓の内容を



第8図 第1次調査における第1調査区(下)・第2調査区平面図
(縮尺1/80、富山大学人文学部考古学研究室2014)

具体的に解明するだけでなく、杉谷古墳群の出現や変遷、さらには富山平野における古墳出現過程を考える上でも重要な知見をもたらすものと言える。
(高橋浩二)



第9図 第1次調査における主な出土遺物
(縮尺1/3、富山大学人文学部考古学研究室2014より抜粋)

参考文献

- 富山市教育委員会 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山大学人文学部考古学研究室 2014 『杉谷4号墳—第1次発掘調査報告書—』

第4章 発掘調査の成果

1. 測量基準点と調査区の設定

杉谷4号墳については、平成23年度に学長裁量経費の交付を受けて、株式会社共和（和歌山市）に依託し、平面直角座標系第VII系（世界測地系）による測量基準点の設置、ならびに4号墳および7号墳を含む周辺現況地形の3D測量を実施した。

設置した基準点は、第2表および第10図のとおりである。3級基準点3-1、3-2は、4号墳東側の駐車場ガードレールのコンクリート基礎内に設置し、4級基準点4-1～4は墳丘周囲に、4-5・6は墳丘上に設けた（第10図）。

平成25（2013）年度は第2次調査として、1974年の富山市による調査において周辺にトレンチが設けられず、状況が未解明である南側突出部を調査の対象とした。

調査対象地の現況をみると、墳丘部の東隅は墳頂部からの稜線が明瞭で平面が直角から鋭角にちかい形状を呈するのに対し、南隅は墳頂部からの稜線が不明瞭で、張り出し状になっている。隅部先端は断ち切られたようにも見え、1974年調査の報告にも指摘のあるように、西側崖面につづく溝状の加工により変形を受けた可能性がある⁽¹⁾。これに続く南側突出部の推定位置は、標高53.50m～52.50m前後の西下がりの緩斜面となっており、その南方には7号墳の墳裾を北から西へめぐる谷状の落ちがある。

調査は、第1次調査の成果、および「墳丘対角線が方位と合致する」という指摘⁽²⁾などを参考に、この緩斜面上にy=-2480.000ラインおよびx=75200.000ラインを基準とする南北10m（幅1.5m）、東西6.5m（幅1m）のL字形のトレンチを設定して実施した（第1・2地区）。その後、調査の進展に従って、それぞれ南へ1.5m、東へ2.0m拡張するとともに、第3、第4-1、2、3、4地区、および第5地区を設定した（各地区の位置と規模は、本文参照）。（次山 淳）

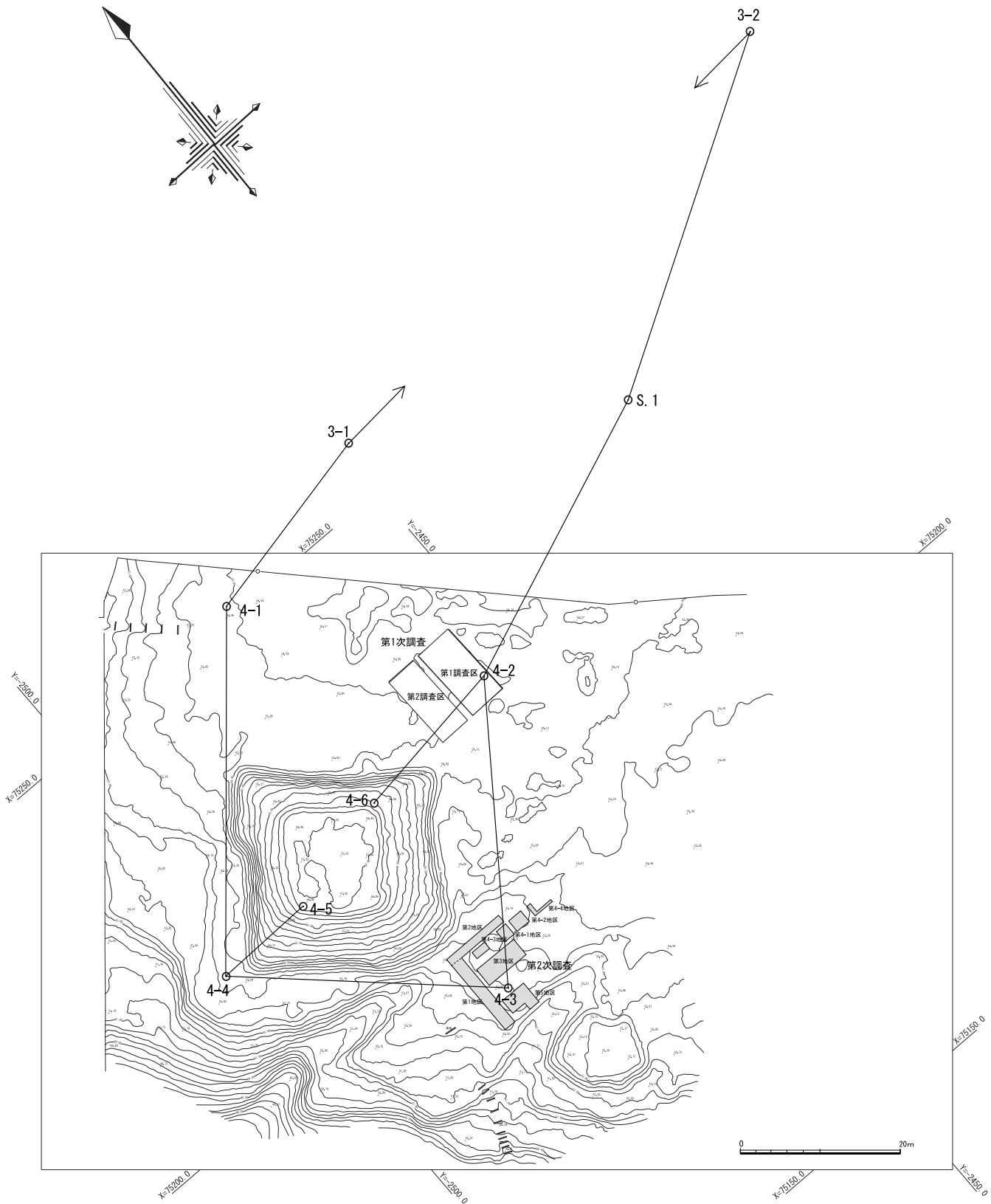
注

(1) 富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』p.7。

(2) 藤田富士夫 1990『古代の日本海文化 海人文化の伝統と交流』中公新書981、中央公論社、p.12。

第2表 調査区基準杭一覧

杭名	X 座標	Y 座標	標高 (m)	杭名	X 座標	Y 座標	標高 (m)
3-1	75256.026	-2448.816	54.347	4-4	75216.280	-2503.809	53.025
3-2	75262.033	-2377.189	53.328	4-5	75216.644	-2490.721	
4-1	75251.309	-2473.559	53.959	4-6	75220.641	-2475.650	
4-2	75223.746	-2454.798	53.797	S1	75237.533	-2418.611	54.219
4-3	75192.102	-2477.931	52.938				国土座標第VII系（世界測地系）に基づく



第10図 調査区基準杭配置図（縮尺1/700）



第11図 調査区配置図（縮尺1/300）

2. 発掘調査の成果

(1) 第1地区

南側突出部及び周溝を確認し、合わせてそれらの形状や規模を明らかにすることを目的に、方形部の南北対角線におおよそ合わせて、方形部南側隅角の現墳裾付近を基点に、南北 10.0m、東西 1.5m の調査区を当初設定した。その後、西側断面に沿って幅 0.3m のサブトレンチを設けながら発掘をすすめた結果、調査区南端において溝状の遺構が検出されたため、南側へ 1.5m 拡張することにした。最終的な調査区の規模は南北 11.5m、東西 1.5m である。

基本層序は表土（第1層）、堆積土（第2～7層）、調査区北側における溝の埋土（第8・9層）、調査区南側における溝状遺構上段部分の埋土（第10～12層）、溝状遺構下段部分の埋土（第13～16層）、そして地山（第17・18層）である。

第2層は炭混じりでしまりの強い黒褐色粘質土であり、第5地区第5層、そして第2地区第4層と対応する。第3層はしまりの強い褐色粘質土である。第4層は明黄褐色のブロックを含むしまりの弱い暗褐色粘質土である。第5層は明黄褐色の極小の粒を15%含むしまりの強い褐色粘質土であり、第2地区第5層と対応する。第6層は橙色のブロックを含むしまりの強い黒褐色粘質土である。第7層は褐色の極小の粒を15%含む炭混じりでしまりの弱い黒褐色粘質土であり、第5地区第6層と対応する。調査区北端から南へ 6.94～8.21m の地点で西側断面にかかる存在する落ち込みは、この第7層を埋土とし、粘性の比較的強い黄橙色の粘質土が部分的に含まれ、樹木根などの搅乱によるものと思われるが、詳細は不明である。

第8・9層は、第2地区で検出されたのと同一の溝の埋土であり、杉谷4号墳築造以降に構築され、堆積したものである。第8層はしまりの弱い黒褐色粘質土で、明黄褐色の粒を3%含む。第9層はしまりの弱い黒褐色粘質土である。それぞれ第2地区の第6層、そして第7層と対応する。溝の掘形はサブトレンチ内において、北側断面から 1.96m 南の地点で検出されている。検出面の標高は 52.650m である。掘形上部が2段掘り状を呈するが、第4-1～第4-4地区では、そのような状況は認められなかった。溝斜面の傾斜角度は約35度で、比較的急傾斜をなしている。第1地区では、溝の上半部における土層の堆積状況等を確認した後、現地表面から約 0.45m 下の地点で調査を終了した。

調査区南側において検出された遺構は、南部が未発掘であり、確実には溝とはできない。そのため溝状遺構と呼ぶことにする。この溝状遺構は北側の斜面が2段の構造となっており、上半部を上段、下半部を下段とそれぞれ呼称する。溝状遺構上段埋土の第10層は明黄褐色の粒を2%含むしまりの弱い褐色粘質土である。同じく第11層は黄褐色の極小の粒を2%含む炭混じりでしまりの強い黒褐色粘質土である。最大 0.29m の厚さで、比較的分厚く堆積している。同じく第12層はしまりの強い褐色粘質土である。溝状遺構の下段部分や北側斜面、また両者の間に見られる平坦面を覆って広い範囲に堆積している。第11層は第5地区第8・9層と、第12層は第5地区第11・12層とそれぞれ対応する。第1地区第11・12層は、調査区南端において、ほぼ水平に堆積している状況である。南側へと下降する傾斜面に堆積しているような様相ではなく、北側斜面に対する溝状遺構の立ち上がりが調査区の南外側に存在することを推測させるような土層の堆積である。

溝状遺構下段埋土の第13層は鉄分を多く含むしまりの強いにぶい赤褐色粘質土である。厚さ

は最大で5cmと非常に薄いが、とりわけ固くしまった土層であり、特徴的な土色も手伝って検出が容易であった。溝状遺構の上段と下段との境界にあって、両者を見分ける際の鍵層となる土層であるが、調査区東側へと引き続く第5地区の溝状遺構からは検出されていない。第14層は明黄褐色の粒を15%含むしまりの強い暗褐色粘質土である。最大0.33mの厚さで、分厚く堆積している。第15層は明黄褐色の粒を15%含むしまりの強い褐色粘質土である。第16層はしまりの強い明黄褐色粘質土である。第16層は溝状遺構下段の最下層に堆積する土層である。

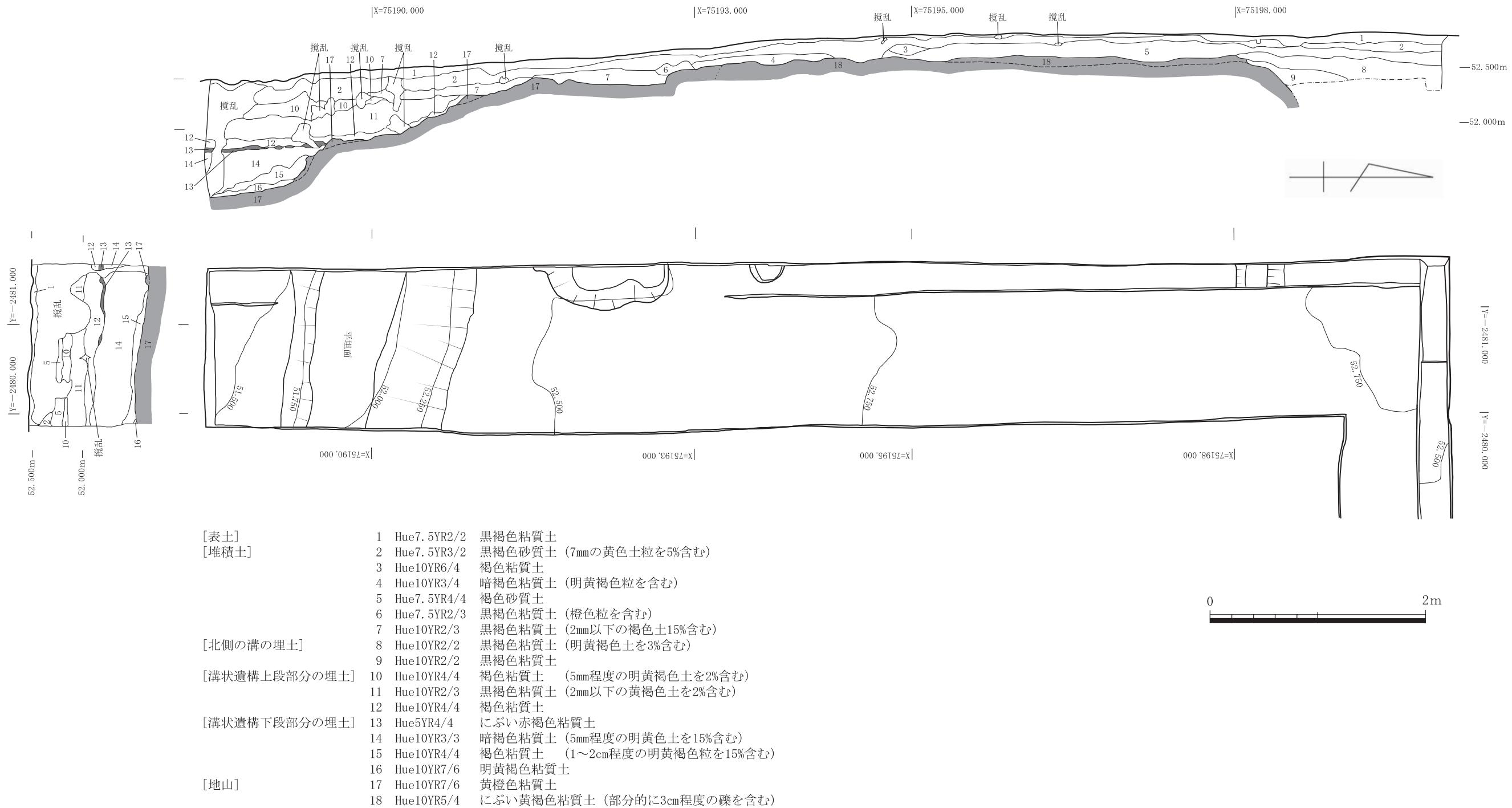
地山の第17層はしまりの強い黄橙色粘質土である。同じく第18層は部分的に3cm程度の礫を含むしまりの強いにぶい黄褐色粘質土である。第18層は上面が広い平坦面をなしており、調査区北端から南へ6.7mの地点において第17層の下へもぐり込むようである。第17層は溝状遺構下段の底面をなす土層である。溝状遺構下段の底面、つまり第17層上面は西側断面の箇所が低く、東側へいくにしたがって徐々に標高が高くなっている。第17層は、第5地区第13・14層と対応する。

溝状遺構の北側掘形は、調査区北端から南へ8.95m地点（西側断面）と9.3m地点（東側断面）の間に位置する。この地点から南側へむけて約30度の角度で傾斜した後、西側断面において調査区北端から9.7～10.3m地点の間が幅約0.6mの平坦面となる。先述のように、この平坦面の高さまでを溝状遺構の上段とした。この平坦面は現地表面から約0.7m下の地点に位置する。平坦面の標高は西側断面で51.920m、東側断面で51.885mである。

溝状遺構下段の上端は、調査区北端から南へ10.35m地点（西側断面）と10.55m地点（東側断面）の間に位置する。この地点から南側へむけて約65度の角度で急傾斜した後、西側断面において調査区北端から10.7～11.5m地点の間は幅0.79mの平坦面となっている。この平坦面が溝状遺構下段の底面をなす。溝状遺構下段の底面は現地表面から約1.1m下の地点に位置する。標高は西側断面で51.453m、東側断面で51.570mである。

第1地区からは土器片16点と鉄片1点が出土した。そのうち主なものについて説明する。鉄片は北側断面から10.1m、西側断面から0.61m、標高52.005m地点において、第8層から出土した。細片のため図化はしていない。第10層からは北側断面から9.82m、西側断面から0.36m、標高51.897m地点において第22図-16の土師器胴部破片が出土した。また、北側断面から10.5m、西側断面から0.13m、標高51.990m地点において第22図-17の土師器胴部破片が出土した。第12層からは北側断面から10.76m、西側断面から0.58m、標高51.865m地点において第22図-11の須恵器胴部破片が出土した。また、北側断面から11.17m、西側断面から0.82m、標高51.907m地点において第22図-12の須恵器胴部破片が出土した。また、北側断面から11.05m、西側断面から0.88m、標高51.882m地点において第22図-13の須恵器胴部破片が出土した。第14層からは北側断面から11.39m、西側断面から0.79m、標高51.746m地点において第22図-15の土師器破片が出土した。これらの遺物は、いずれも杉谷4号墳築造以降と考えられるものである。

以上のように溝状遺構の南部の様相が未確認なこともあります、上段部分と下段部分との関係性はあまり明確ではない。土層の堆積状況から見るならば、2つの遺構が重複している可能性も考えられる。溝状遺構は、東側に位置する第5地区からも上段部分だけが部分的に検出されているが、下段部分は未確認である。このように、溝状遺構の性格については十分に把握できていない。



第12図 第1地区平面図・断面図（縮尺1/40）

おらず、杉谷 4 号墳との関係性もまた不明確である。結果的に、第 1 地区においては南側突出部に伴う周溝などの遺構を確認するには至らなかった。 (吉田皓・高橋浩二)

(2) 第 2 地区

南側突出部、とくにその側面部の形状と規模、及び周溝を確認するため、第 1 地区北端の東側に直交させて全体が L 字形になるように設定した。当初の調査区は第 1 地区東端を基点に東西 5m であったが、その後東側へ 2m 拡張し、最終的に東西 7m、南北 1m の規模となった。

基本層序は表土（第 1 層）、表土下第 2 層、堆積土（第 3～5 層）、溝埋土（第 6～9 層）、そして地山（第 10・10'・10''・11・11' 層）である。

第 1 層の表土は黒褐色を呈し、ビニールやガラス等が多量に含まれていた。第 2 層は黒褐色砂質土である。ここからは拳程度の大きさの、性格不明の集石が調査区西端（第 1 地区との境目）から 4.66～5.66m の範囲で検出された。

第 3 層は黄色土の粒を多く含む黒褐色砂質土である。この層は、第 5 層が再堆積する過程で黒褐色土と混じり合った土層と判断される。第 4-3 地区の第 2 層と対応する。第 4 層（第 1 地区第 2 層と対応）は同じく黒褐色砂質土であり、第 5 層の上に薄く堆積している。南側断面の第 1' 層は極褐色砂質土で、第 5 層が表土と混じり合った層である。第 5 層（第 1 地区第 5 層と対応）は黄褐色を呈する褐色砂質土である。当初は第 5 層が地山と認識されたが、北側断面に幅 0.3m のサブトレーナーを設けて調査を進めた結果、後に溝埋土と判明する黒褐色弱粘質土の第 6 層（第 1 地区第 8 層と対応）が下層に存在することを確認し、さらに拡張区にかかる第 3 層、そして第 2 層の下からも第 6 層が検出されたことによって、第 2 調査区全域にわたって第 6 層が堆積していることが明らかになった。

その後、第 6 層の下層にはさらに第 7～9 層が存在するということが明らかになり、また南側に新設された第 4-1 地区では北側へと傾斜する斜面をもつ溝の掘形が検出された。そして最終的には、先述のように第 1 地区北側のサブトレーナー内からも溝の掘形が検出された。これらの結果、第 2 地区の範囲において、杉谷 4 号墳築造以降に墳丘裾部周辺を東西方向へ横切る形で構築された溝が存在するということが明らかになった。なお、第 2 地区の北側は未発掘につき、溝北半部の様相については未詳である。

第 6 層は先述のように黒褐色弱粘質土である。第 7 層も同じく黒褐色弱粘質土であるが、第 6 層と比べて層中に含まれるブロックが相対的に少ない。第 8 層は黒褐色粘質土であり、粘質、しまりともにやや強い。なお、第 4-1 地区には第 7・8 層は存在しないようである。南側断面の A は暗褐色粘質土のブロック、また東側断面の α は黒褐色砂質土のブロックである。第 2 地区第 9 層はしまりの強い黒色粘質土である。第 9 層は溝の最下層に堆積する土層である。北側断面で見ると、土層の厚さは東端で 0.16m、A-A' 断面の箇所で約 0.40m を測り、東端から西側へいくにつれて厚くなる。第 9 層が最も分厚く堆積する A-A' 断面（調査区西端から東へ 5.0 m の地点）で見ると、南側へ立ち上がる溝の斜面に沿って徐々に薄くなり、南端では約 0.18m の厚さとなる。東側断面では底面から南側斜面にかけてほぼ一定の厚さで堆積している。第 9 層は溝内において最も分厚く堆積する土層であるが、第 4-3 地区では認められなかった。

第 9 層とその下層にある第 10・10' 層との境目が溝の底面である。確認された溝の最深部は、



第13図 第2地区平面図・断面図(縮尺1/40)

第2地区断面図層名

[表 土]	1	Hue7.5YR2/2	黒褐色粘質土	(ブロックを少量含む)
	1'	Hue7.5YR2/3	極褐色砂質土	(5mmの黄色土ブロックを5%含む)
[表土下]	2	Hue7.5YR3/2	黒褐色砂質土	(7mmの黄色土ブロックを5%含む)
[堆積土]	3	Hue7.5YR3/2	黒褐色砂質土	(5mmの黄色土ブロックを20%含む)
	4	Hue7.5YR3/2	黒褐色砂質土	(5mmの黄色土ブロックを3%含む)
	5	Hue7.5YR4/4	褐色砂質土	(ブロックを少量含む)
[溝埋土]	6	Hue10YR2/3	黒褐色弱粘質土	(ブロックを2%含む)
	7	Hue10YR2/3	黒褐色弱粘質土	(ブロックを1%含む)
	8	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土	(ブロックを1%含む)
	9	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土	(ブロックを2%含む)
		ブロックA	Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
		ブロックα	Hue7.5YR2/2	黒褐色砂質土 (5mmの黄色土ブロックを10%含む)
[地 山]	10	Hue10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土	
	10'	Hue7.5YR3/4	暗褐色粘質土	(1mmの黄色土ブロックを3%含む)
	10''	Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土	(1cmの黄色土ブロックを7%含む)
	11	Hue2.5Y4/4	オリーブ褐色土	(6mmの黄色土ブロックを2%含む)
	11'	第11層中の礫		

東端で標高 52.108m、A-A'断面の箇所で標高 51.915m というように、西側へいくしたがって深くなる。溝の南側斜面は東側断面では約 20 度だが、A-A'断面の箇所では約 40 度と比較的急な傾斜をなしている。今回の調査では溝の南半部が確認されたが、底部中央から北半部については未確認であり、溝の正確な深さや規模、形状等については未詳である。なお、溝の調査は層位関係等を明らかにした後、第 4-3 地区の東側断面とそろえて A-A'断面の箇所で作業を終えている。

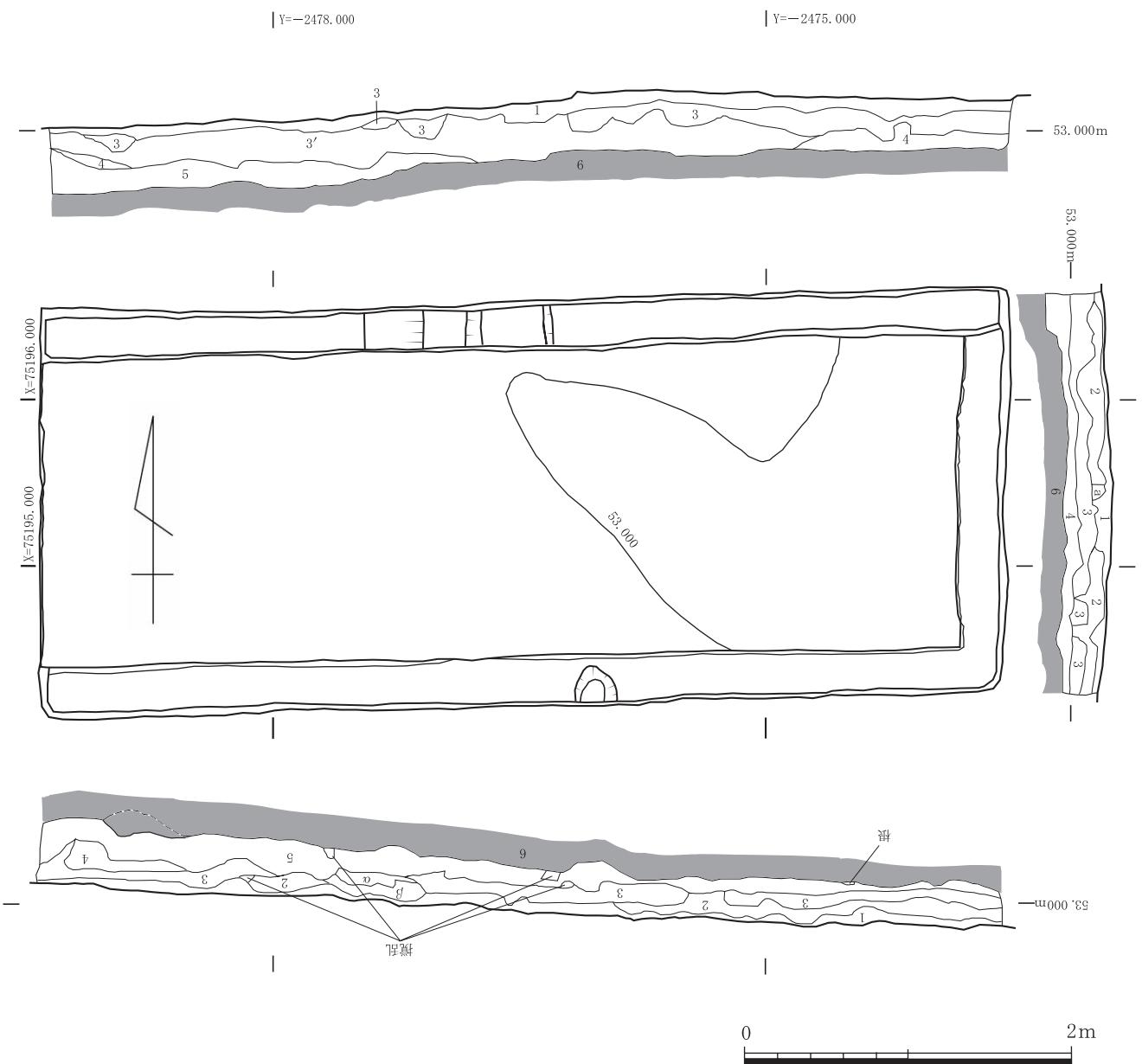
地山の第 10 層はしまりの強いにぶい黄褐色粘質土であり、第 4-1 地区第 10 層と対応する。同じく地山の第 10' 層はしまりのやや強い暗褐色粘質土である。同じく第 10'' 層は黒褐色粘質土である。第 10' 層と第 10'' 層はともに溝最下層の第 9 層の浸潤を受けて土色が暗化している。第 11 層は粘性が乏しく、しまりが非常に強いオリーブ褐色土の岩盤質の地山である。第 11 層には岩盤質の露出が一部に見られ、それが集中して礫化した箇所が第 11' 層である。

第2地区からは土器片7点と鉄片1点が出土した。このうち図化できたのは次のものである。表土からは第22図-5の須恵器杯または椀の口縁部破片、第22図-7の須恵器杯底部破片、第22図-8の須恵器高台部破片が出土した。第2層からは第22図-9の須恵器胴部破片が出土した。溝埋土の第7層からは第22図-10の須恵器胴部破片が出土した。(菅野友希・高橋浩二)

(3) 第3地区

第1地区の地山である第18層(にぶい黄褐色粘質土)の範囲を確認し、合わせて南側突出部側面部を検出するため、第1地区の東側断面から 0.5m、第2地区の南側断面から 2.5m の地点に、東西 6m、南北 2.5m の調査区を設定した。

全体的にまず約 0.2m 堀り下げたが、土層が不明瞭であったため、幅 0.3m のサブトレンチを北側、南側、東側断面にそれぞれ設定し、現地表面から約 0.3m の深さまで掘りすすめた。その後は地山を精査するため、一部さらに 0.1m ほど掘り下げた。



[表土]	1	Hue5YR2/2	黒褐色粘質土
[堆積土]	2	Hue7.5YR2/2	黒褐色砂質土 (黄褐色土を含む)
	3	Hue7.5YR2/3	極暗褐色弱砂質土 (黄褐色の5~7cm程度のブロックを含む)
	3'	Hue7.5YR3/4	暗褐色粘質土 (黄色土を1%含む)
	4	Hue10YR4/6	褐色粘質土
	5	Hue7.5YR4/4	褐色砂質土
	a	Hue7.5YR4/6	褐色弱粘質土
	α	Hue7.5YR4/4	褐色砂質土
	β	Hue10YR5/3	暗褐色砂質土
[地山]	6	Hue7.5YR4/3	褐色粘質土

第14図 第3地区平面図・断面図 (縮尺1/40)

基本層序は表土（第1層）、堆積土（第2～5層）、地山（第6層）である。

第1層の表土はしまりの弱い黒褐色粘質土である。堆積土の第2層はしまりのやや弱い黒褐色砂質土である。第2地区第5層と同質の黄褐色土を部分的に含む。また、第3地区南側断面の第2層には第4層起源と思われる黄褐色土が含まれている。第4-1地区南側断面第2層、第4-3地区東側断面第2層と対応する。東側断面aは褐色でしまりが弱い粘質のブロックである。第3層はしまりの強い極暗褐色弱砂質土である。東側断面の北側に5～7cm程度の黄褐色ブロックを含む。第2地区北側断面第5層、また第4-3地区第3層と対応する。第3'層は黄色粒が1%含まれるしまりが強い暗褐色粘質土で、北側断面にのみ存在する土層である。南側断面β層はしまりが弱い暗褐色砂質土で、第3層から派生したと思われる土層である。同じくα層はしまりが強い褐色砂質土である。第4層はしまりが強い褐色粘質土である。第5層はしまりがやや弱い褐色砂質土である。第5層は地山の可能性があるが、確定することはできなかった。

第6層は地山で、しまりが強い褐色粘質土である。第6層上面の標高は東側断面で52.980m、西側断面で52.580mであり、調査区の東側から西側へむけて約5度の角度で地山面が下降していることが明らかになった。なお、南側突出部は未検出である。
(藤井奎臣)

(4) 第4-1地区

第2地区で明らかにされた溝の掘形の検出、さらには南側突出部の確認を目的に、第2地区東側断面に合わせて、0.3m幅のアゼをはさみ、南北1.7m、東西1.5mの調査区を設定した。

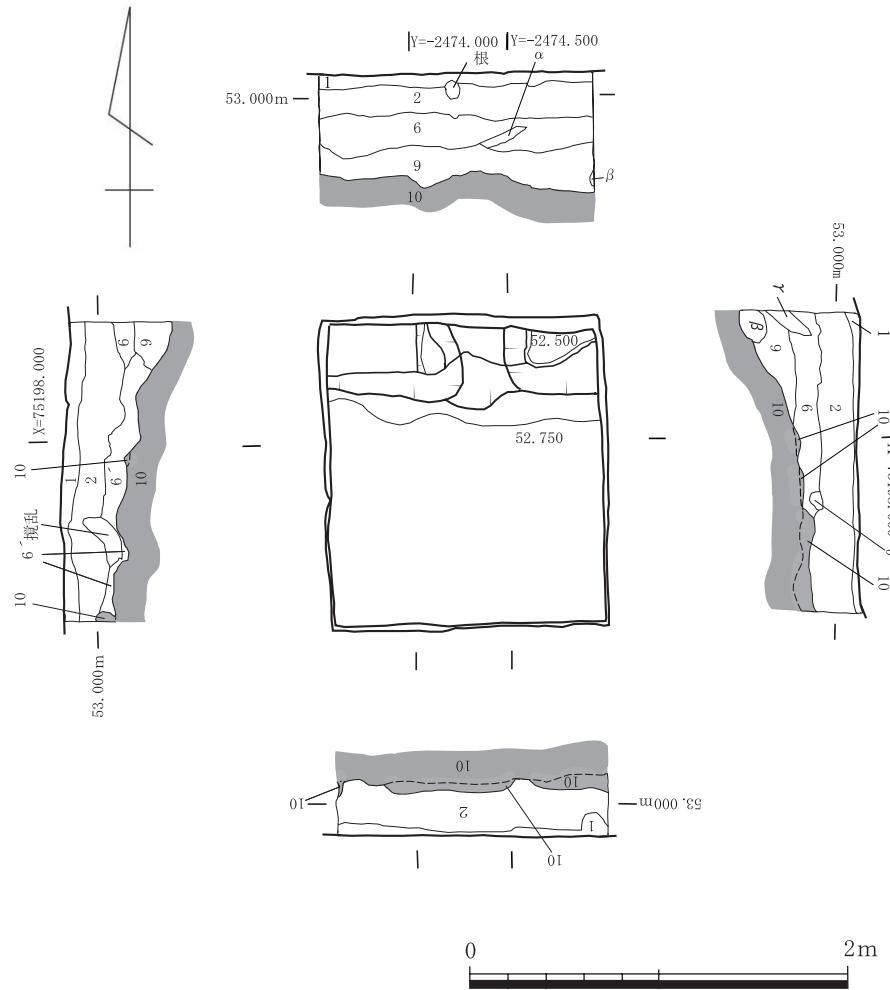
基本層序は表土（第1層）、堆積土（第2層）、溝埋土（第6・6'・9層）、地山（第10層）である。

第1層の表土はしまりの弱い黒褐色粘質土である。堆積土の第2層はしまりの弱い黒褐色砂質土で、第2地区第2層、第3地区第3層、また第4-2地区・第4-3地区・第4-4地区的第2層とそれぞれ対応する。

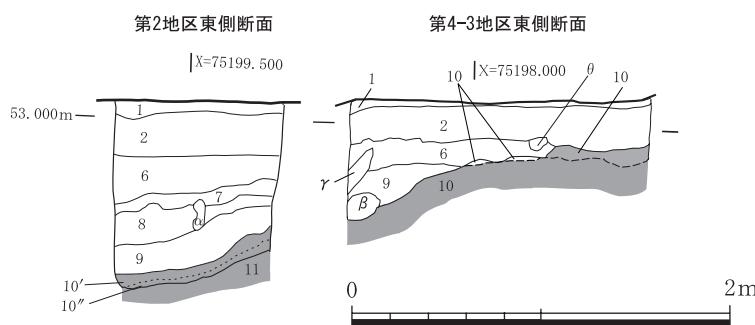
これらの土層を除去し、第6層や第6'層、第10層を精査する過程で、北側断面から約0.4m南の地点において溝の掘形が検出された。検出面の標高は52.697～52.755mである。溝埋土の第6層はしまりの弱い黒褐色弱粘質土である。層中には約1cmの黄色土粒が混じるブロック α や暗褐色粘質土のブロック θ が含まれる。西側断面第6'層は黄色土の小さな砂粒を1%程度含んだしまりのやや強い黒褐色粘質土である。第6層と類似するが、土質が異なるため第6'層として区別した。第9層はしまりの弱い黒色粘質土である。北側断面では褐色粘質土のブロック β が層中に含まれる。また、東側断面では第6層にまたがって暗褐色粘質土のブロック γ が見られる。第16図のように、第6層と第9層は第2地区的同層とつながるものであり、土質も共通する。第9層下面が溝の底面であり、約30度の傾斜面となっている。

第10層はしまりの強いにぶい黄褐色粘質土の地山である。

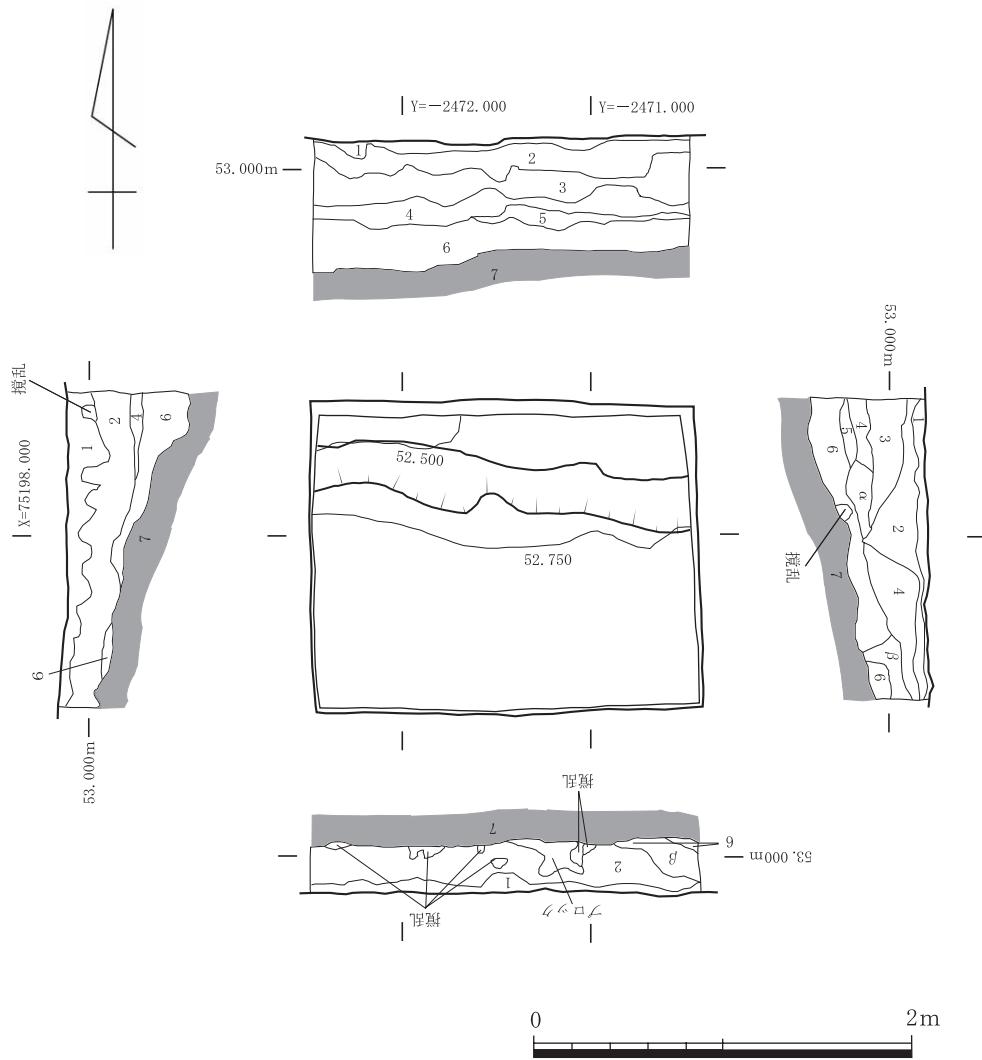
遺物は西側断面から東へ1.23m、標高52.614mの地点において、北側断面第9層にくい込んだ状況で第22図-1の弥生土器または土師器壺の頸部破片1点が出土した。
(小林史佳)



第15図 第4-1地区平面図・断面図（縮尺1/40）



第16図 第2地区東側断面・第4-1地区東側断面合成図（縮尺1/40）



[表土]	1	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土
[堆積土]	2	Hue5YR3/1	黒褐色粘質土
	3	Hue5YR3/1	黒褐色粘質土
	4	Hue5YR3/1	黒褐色粘質土 (黄色土を部分的に含む)
	5	Hue5YR2/3	暗赤褐色粘質土 (赤褐色土を含む)
	α	Hue7.5YR2/2	黒褐色粘質土 (黄色土を含む)
	β	Hue7.5YR3/2	黒褐色弱粘質土
[溝埋土]	6	Hue5YR1.7/1	黒色粘質土
[地山]	7	Hue7.5YR4/3	褐色粘質土

第17図 第4-2地区平面図・断面図（縮尺1/40）

(5) 第4-2 地区

第2地区で明らかにされた溝の掘形の検出、さらには南側突出部の確認を目的に、第4-1地区の東に0.5m幅のアゼをはさんで、南北1.7m、東西2.0mの調査区を設定した。

基本層序は表土（第1層）、堆積土（第2～5層）、溝埋土（第6層）、地山（第7層）である。

第1層の表土はしまりの弱い黒褐色粘質土である。堆積土の第2層はしまりの弱い黒褐色粘質土で、第4-1地区第2層、第4-4地区第2層と対応する。第3層はしまりの強い黒褐色粘質土である。第4層は黄色土の粒が部分的に含まれるしまりの強い黒褐色粘質土である。第5

層は赤褐色土の粒を多く含むしまりの強い暗赤褐色粘質土である。第4-1地区第6層と対応するが、同層からは赤褐色土の粒は未確認である。 α 層は黄色土の粒を多く含むしまりの強い黒褐色粘質土である。 β 層はしまりの弱い黒褐色弱粘質土層である。

これらの土層を除去し、第6層と第7層を精査する過程で、北側断面から南へ0.45（西側断面）～0.7m（東側断面）の間において溝の掘形が検出された。検出面の標高は52.757mである。溝埋土の第6層は黄褐色土の粒を多く含むしまりの強い黒色粘質土で、第4-1地区第9層と対応する。地山の第7層はしまりの強い褐色粘質土である。

第4-2地区からは土器片10点、石筆1点、鉄釘1点が出土した。このうち図化できたものを中心に説明する。第2層からは北側断面から1.33m、西側断面から0.17m、標高53.055m地点において第22図-2の縄文土器あるいは弥生土器・土師器と考えられる破片が出土した。第3層からは北側断面から0.23m、西側断面から0.17m、標高52.989m地点において第22図-21の鉄釘が出土した。また、北側断面から0.18m、西側断面から1.76m、標高53.010m地点において第22図-22の石筆が出土した。また、北側断面から0.74m、西側断面から1.65m、標高52.896mの地点において第22図-3の須恵器杯または椀の口縁部破片が出土した。第4層からは北側断面から0.96m、西側断面から1.32m、標高52.855m地点において外面が赤彩された弥生土器または土師器の胴部破片が出土した。細片のため図化はしていない。第5層からは北側断面から0.56m、西側断面から0.13m、標高52.724m地点において第22図-6の須恵器蓋端部破片が出土した。

（藤井奎臣）

（6）第4-3地区

第2地区で明らかにされた溝の掘形の検出、さらには南側突出部の確認を目的に、第2地区A-A'断面に合わせて0.3m幅のアゼをはさみつつ、第4-1地区の西側に南北1.0m、東西2.0mの調査区を設定した。西側断面から約0.6mの箇所一帯には樹木根の搅乱があり、溝掘形の検出に支障が出たため、東側断面に0.15m幅のサブトレンチを設けて調査をすすめた。

基本層序は表土（第1層）、堆積土（第2・3層）、溝埋土（第4層）、地山（第5層）である。

第1層の表土はしまりの弱い黒褐色粘質土である。第2層はしまりの弱い黒褐色粘質土で、第2地区第3層と対応する。第3層はしまりの強い褐色砂質土で、第2地区第3層および第3地区第3層と対応する。

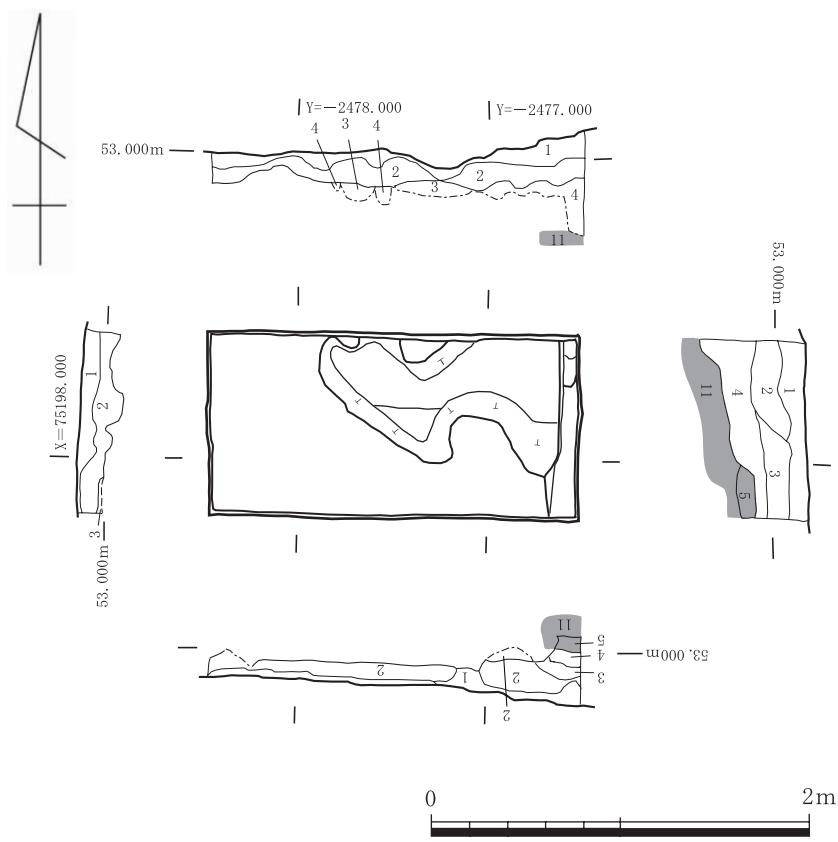
これらの土層を除去し、第4層と第5層を精査する過程で、現地表面から約0.6m下の地点において溝の掘形が検出された。検出面の標高は52.600mである。溝埋土の第4層はしまりの弱い黒褐色粘質土である。第2地区第6層、第4-1地区第6層と対応する。

第5層は地山で、しまりの強い黄褐色粘質土である。第4-1地区とほぼ同じ深さの地点から検出されている。

（小林史佳）

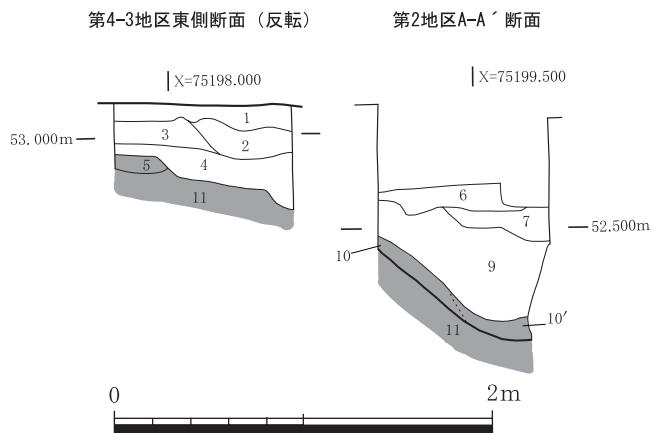
（7）第4-4地区

第4-2地区までに検出された溝が東側へどれほど伸びているのかを確認するため、第4-2地区から東へ1.0mの地点に南北1.7mで幅0.5m、東西4.8mで幅0.3mのL字形に調査区を設定した。

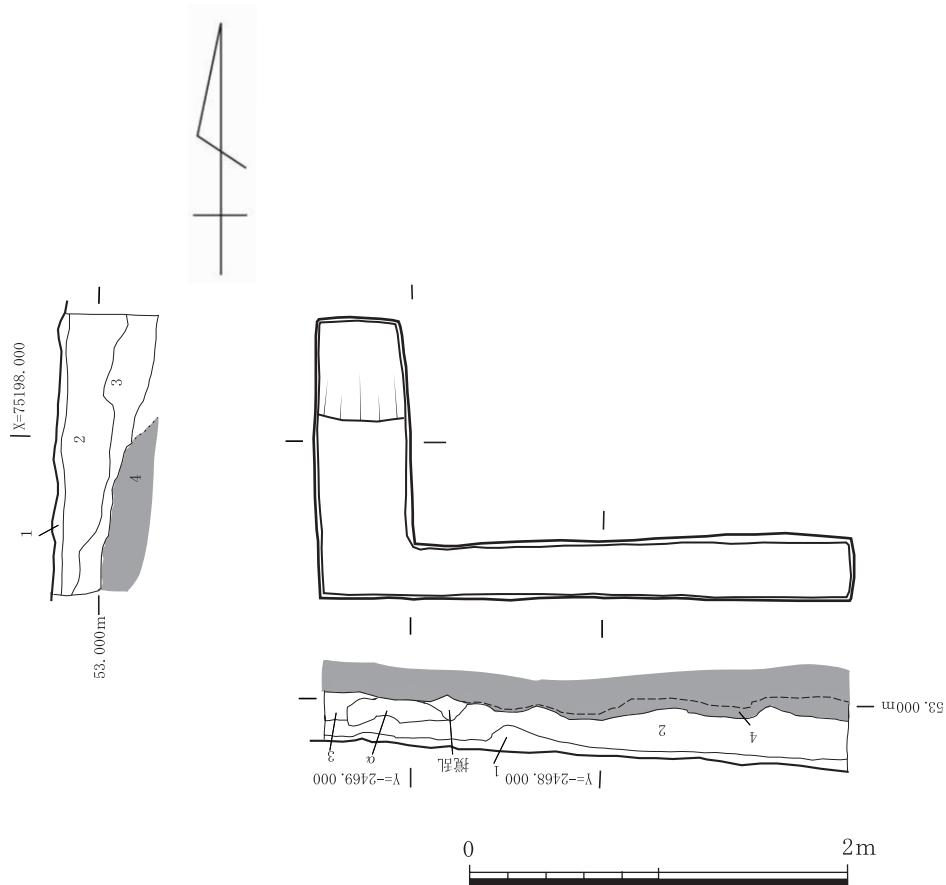


[表土]	1	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土
[堆積土]	2	Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土
	3	Hue7.5YR4/4	褐色砂質土 (1mm以下の砂粒を含む)
[溝埋土]	4	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土 (1mm以下の砂粒を含む)
[地山]	5	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土 (1mm以下の砂粒を含む)
	11	Hue2.5Y4/4	オリーブ褐色土 (6mm程度の砂粒を含む)

第18図 第4-3地区平面図・断面図（縮尺1/40）



第19図 第2地区A-A'断面・第4-3地区東側断面合成図（縮尺1/40）



第20図 第4-4地区平面図・断面図（縮尺1/40）

基本層序は表土（第1層）、堆積土（第2層）、溝埋土（第3層）、地山（第4層）である。表土の第1層はしまりの弱い黒褐色粘質土である。第2層はしまりのやや強い黒褐色粘質土である。西側断面では砂質性がやや強い。第2地区第2層、第4-2地区第2層などと対応する。 α は第2層と第3層とにまたがって存在する黄色土の砂粒を少量含む黒褐色粘質土のブロックである。

これらの土層を除去し、第3層と第4層を精査する過程で、調査区北側の現地表面から約0.6m下の地点において溝の掘形が検出された。検出面の標高は52.850mである。溝埋土の第3層は黒褐色弱粘質土で、第2地区第6層と対応する。

第4層は褐色土の地山である。第4-1地区第10層、第4-2地区第7層などと対応する。遺物は細片のため図化していないが、第2層から土器片が1点出土した。

調査の結果、溝はさらに東側へ伸びていることが明らかになった。なお、南側突出部は確認するに至らなかった。
 (小林史佳)

(8) 第5地区

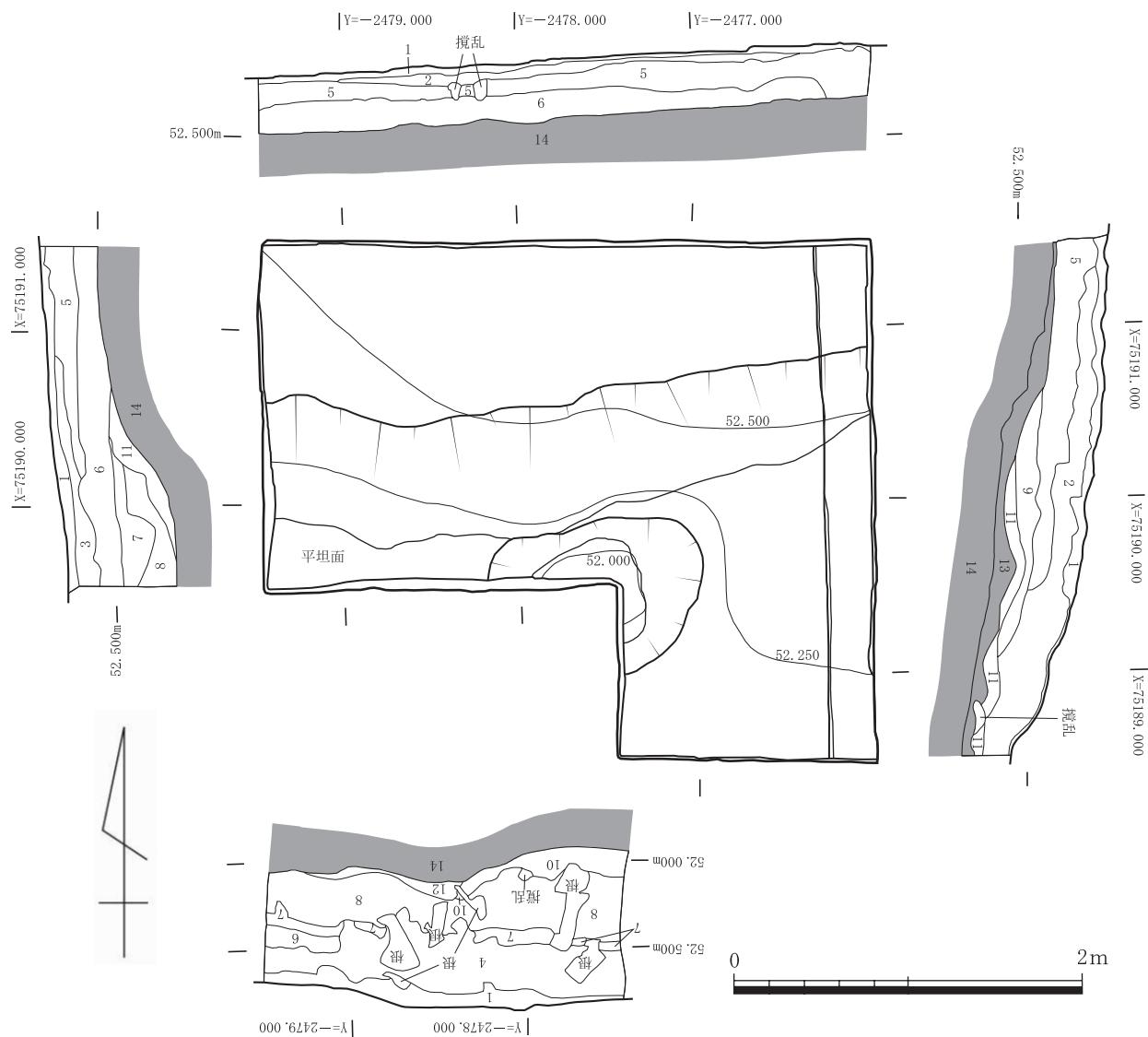
第1地区南側から検出された溝状遺構の範囲や規模、形状の確認を目的に、第1地区東側断面から0.5m、第3地区南側断面から2.7mの間隔をあけて、南北2.0m、東西3.5mの調査区を当初設定した。その後、溝状遺構の下段部分や、第5地区南側中央部で検出された落ち込みの精査を目的として、南側中央にある樹木を避ける形で、東側断面に沿って南側へ1m、東西幅1.5m拡張した。

基本層序は、表土（第1層）、堆積土（第2～6層）、溝状遺構（上段部分）埋土（第7～12層）、地山（第13・14層）である。

第1層は表土で、黒褐色粘質土である。堆積土の第2層は暗褐色粘質土で、北側断面から東側断面にかけて堆積しており、南側へ向かうに従って厚さを増している。同じく堆積土の第3層は暗褐色粘質土で、褐色の極小粒を2%含む。第4層も同じく暗褐色粘質土であるが、褐色の極小粒を10%含む点で第3層とは区別される。第4層は南側断面において、最大0.44mと最も厚く堆積している。第2～4層は基本的に同じ土質であるが、北側断面側から南側断面側へ向けて扇状に堆積する過程で褐色粒が混じり込んだものと考えられ、褐色粒の程度の差によって土層が分けられる。なお、褐色粒が混じる第3・4層のような土層は、第1地区、第3地区では未確認である。第5層は黄褐色の小粒を15%含むしまりのやや弱い暗褐色粘質土であり、第1地区第2層と対応する。この層は、調査区の北東側で厚く、南西方向へ向けて徐々に薄く堆積している。第6層は褐色の極小粒を15%含むしまりのやや弱い黒褐色粘質土で、部分的に炭の小粒が含まれる。第1地区第7層と対応する。

これらの土層を取り除いたところ、後述のように、地山を掘り込んで構築されている溝状遺構（上段部分）の掘形が検出された。溝状遺構埋土の第7層は褐色の極小粒を10%含む黒褐色粘質土である。この層は、南側断面においては第4層と第8層の間に所どころ現れ、薄く堆積する。第8層は暗褐色粘質土である。この層は、南側断面においては第4層に次いで厚く堆積しており、厚さは最大で0.36mである。第9層はにぶい黄褐色の極小粒を10%含む黒褐色粘質土である。部分的に炭の小粒が含まれる。第8・9層は、第1地区第11層と対応する。第10層は黄褐色の小粒を10%含む黒褐色粘質土である。底面に近づくにつれて土色がやや黒みを帯びる傾向にある。この層は調査区南側中央部（西側断面から約1.3～2.56mの間）に存在する遺構状の落ち込み部分にだけ堆積している。この落ち込み部分の範囲は南北0.9m、東西1.2mであり、標高は上面で52.214m、底面で51.919mを測る。深さは約0.3mである。当初は橢円形を呈する遺構と思われたが、掘形が不明瞭で、遺物の検出もみられなかつたため、単なる落ち込みと判断した。第11層は褐色の極小粒を10%含むしまりのやや弱い暗褐色粘質土である。第12層も同じく暗褐色粘質土である。第11・12層は、第1地区第12層と対応する。

溝状遺構の掘形は北側断面から南へ0.9m（西側断面）、1.06m（中央部西）、0.6m（東側断面）の地点をそれぞれ通り、わずかながら弧状を呈してつながる。掘形上端の標高は西側断面で52.417m、中央部西の地点で52.480m、東側断面で52.654mである。溝状遺構の下端は北側断面から南へそれぞれ1.6m（西側断面）、1.7m（中央部西）、1.0m（東側断面）地点の、第9層または第11層の下に存在する。下端の平面形は、掘形上端の形状に沿ってやはり弧状を呈する。下端の標高は西側断面で52.085m、中央部西の地点で52.137m、東側断面で52.497



[表土]	1 Hue10YR2/3	黒褐色粘質土
[堆積土]	2 Hue10YR3/4	暗褐色粘質土
	3 Hue10YR3/4	暗褐色粘質土 (1mm程度の褐色粒を2%含む)
	4 Hue10YR3/4	暗褐色粘質土 (1mm程度の褐色粒を10%含む)
	5 Hue10YR3/4	暗褐色粘質土 (1～2mmの黄褐色粒を15%含む)
	6 Hue10YR3/2	黒褐色粘質土 (1mm程度の褐色粒を15%含む)
[溝状遺構埋土]	7 Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土 (1mm程度の褐色粒を10%含む)
	8 Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
	9 Hue10YR3/2	黒褐色粘質土 (1mm程度にぶい黄褐色粒を10%含む)
	10 Hue7.5YR3/2	黒褐色粘質土 (1～2mmの黄褐色粒を10%含む。底面側ではHue7.5YR3/1の土色となる)
	11 Hue10YR3/2	暗褐色粘質土 (1mm程度の褐色粒を10%含む)
	12 Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
[地山]	13 Hue10YR7/8	黄橙色粘質土
	14 Hue10YR5/6	黄褐色粘質土

第21図 第5地区平面図・断面図 (縮尺1/40)

mである。掘形上端と下端の間は、22~25度の角度で南側へ降る傾斜面をなしている。この溝状遺構は、位置関係や等高線の走向と照らし合わせて、第1地区の溝状遺構上段部分につながるものと判断できる。

西側断面および中央部西における溝状遺構の下端から南側断面の間は、南側へ向けてわずかに傾斜するだけの平坦面となっている。平坦面の幅は検出された部分で0.18~0.4mである。平坦面上面の標高は52.049~52.085mである。第1地区で検出された溝状遺構上段部分と下段部分との間に見られる平坦面に対応するものである。調査区南側中央部にある落ち込み部分の東から東側断面の間は標高52.250~52.460mを測り、この平坦面と比べて約0.2~0.4m高くなっている。このことから、平坦面は落ち込み部分に重複する形で消滅するものと考えられる。東側断面ではその中央部において、第11層の堆積する箇所が幅約0.6m、深さ約0.1mの浅い皿状の凹みとなるが、平面においては溝のような遺構の掘形は検出されなかった。

落ち込み部分の東側から拡張区は、第13層の地山面が南側へ向けて緩やかに下降する傾斜面となっている。拡張区は溝状遺構下段部分の検出が想定される箇所であるが、第11層の下から遺構を確認することはできなかった。そこで、東側断面に沿って幅0.3mのサブトレンチを設定し、さらに下層を0.05~0.1mほど掘り下げたところ、明らかな地山である第14層を検出し、その上面にも溝状遺構下段部分の遺構は存在しないことが確認された。第13層は黄橙色粘質土であり、東側断面において第14層の上に薄く堆積する。他の断面には見られなかった。第14層は黄褐色粘質土で、現地表面下約0.3mの地点から認められる。第14層は第1地区第17・18層、第3地区第6層と対応する地山であり、西側および南側の方向へ下降している。

以上のように、第1地区で検出された溝状遺構上段部分が緩やかな弧状を呈しながら東側へ伸びること、また溝状遺構下段部分は第5地区の範囲には続かないことなどが明らかになった。なお、第1地区と同様に溝状遺構の南部は未調査のため、その規模や形状などは未詳である。

第5地区からは土器片8点と陶器片4点が出土した。このうち図化できたものを中心に説明する。表土からは北側断面から1.61m、西側断面から1.53m、標高52.817m地点において第22図-14の土師器杯または椀底部破片が出土した。第2層からは北側断面から2.35m、西側断面から3.41m、標高52.672m地点において第22図-20の陶器擂り鉢口縁部破片の他に、土師器片2点が出土した。第5層からは北側断面から0.8m、西側断面から2.9m、標高52.678m地点において第22図-4の須恵器杯または椀口縁部破片が出土した。また、北側断面から1.6m、西側断面から2.51m、標高52.649m地点において第22図-18の陶器口縁部破片が出土した。第8層からは北側断面から1.53m、西側断面から0.11m、標高52.335m地点において第22図-19の陶器胴部破片の他に、土器片2点が出土した。細片のため図化していないが、第4層・第7層・第11層から土器片1点がそれぞれ出土した。

(岡山充味・高橋浩二)

第5章 出土遺物

今回の調査では各調査地区から合わせて弥生土器または土師器 23 点、須恵器 15 点、陶器 5 点、鉄釘・鉄片 3 点、石筆 1 点が出土した。ここではこのうち、図化できた 22 点を取り上げて説明する。

1 は、第 4-1 地区北側断面第 9 層から出土した弥生土器または土師器の壺の頸部と考えられるものである。頸部には幅 2.5~3.2 cm、高さ約 1.2 cm の比較的分厚い三角形状の突帯が貼付けられている⁽¹⁾。内外面ともに装飾は認められない。色調は外面と内面上半が灰黄橙色、内面下半が黄橙色を呈する。胎土は直径 3 mm 以下の砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は比較的良好であるが、器面の荒れや剥離が見られ、遺存状態はあまりよくない。

2 は、第 4-2 地区第 2 層出土の縄文土器あるいは弥生土器・土師器と考えられる破片である。器壁は 1.4 cm と比較的厚いものである。胎土は直径 1 mm 以下の砂粒を多く比較的含む。色調は外面が黄橙色、内面が暗黒灰色を呈する。焼成は比較的良好である。

3 は、第 4-2 地区第 3 層から出土した須恵器の杯または椀の口縁部破片である。口径は約 11.5 cm である。内外面ともに轆轤回転ナデ調整が施されている。色調は灰白色を呈する。胎土は緻密である。やや軟質であるが、焼成は比較的良好である。

4 は、第 5 地区第 5 層から出土した須恵器の杯または椀の口縁部破片である。外面には轆轤回転ナデ調整が施されている。内外面ともに自然釉がかかる。色調は暗灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

5 は、第 2 地区表土から出土した須恵器の杯または椀の口縁部破片である。内外面には右回りの轆轤回転ナデ調整が施されている。色調は青灰色を呈する。胎土は直径 2 mm 以下の砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は良好である。

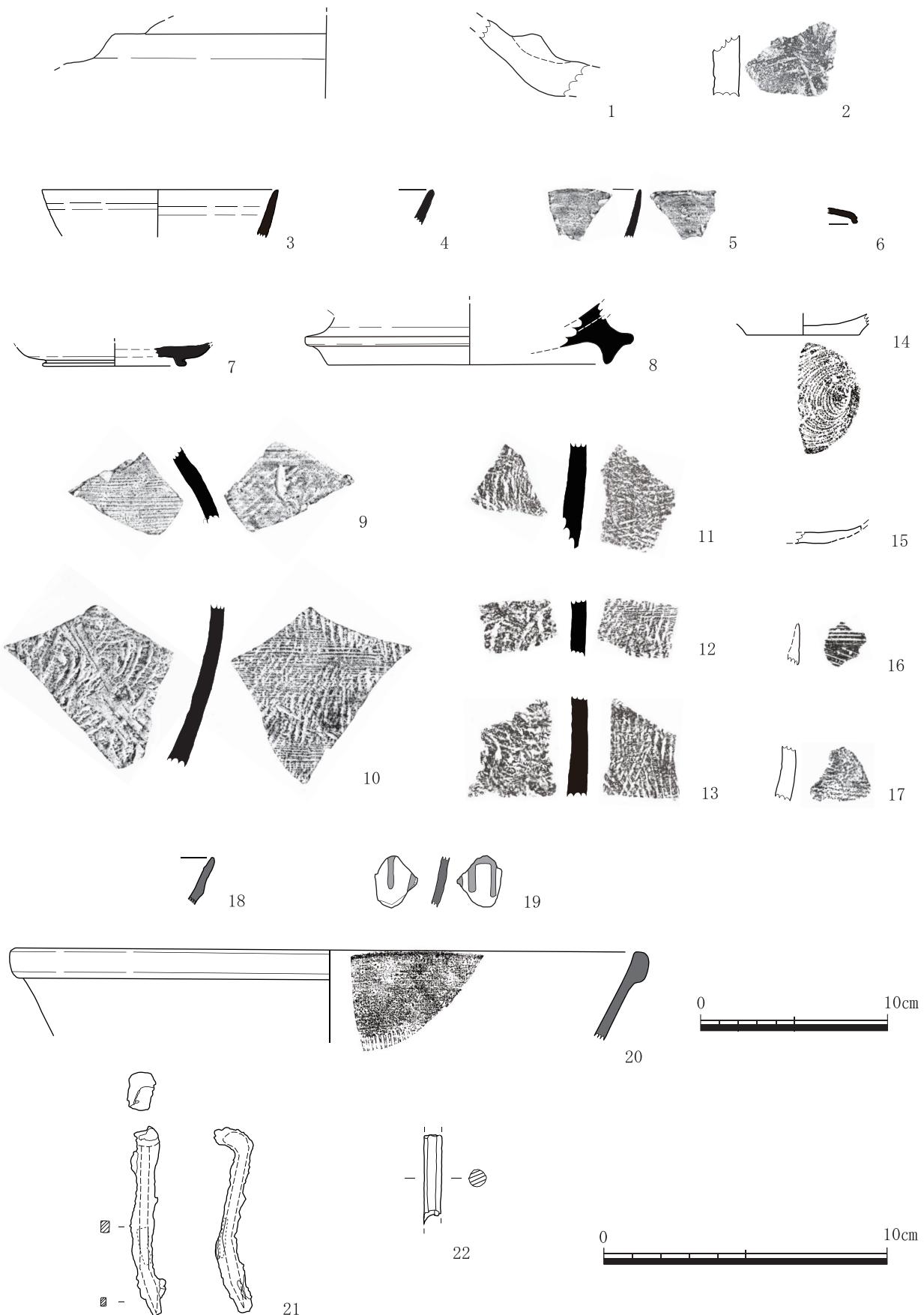
6 は、第 4-2 地区第 5 層から出土した須恵器蓋の端部破片である。内外面ともにナデ調整が施されている。色調は灰白色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

7 は、同じく第 2 地区表土から出土した須恵器杯の底部破片である。底部には若干押しつぶれた小形の貼付高台が付く。底径は約 7.5 cm である。内外面ともに轆轤回転ナデ調整が施されている。色調は灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

8 は、第 2 地区表土から出土した須恵器壺の高台部破片である。貼付高台であり、底径は約 15 cm を測る。高台は中位において外側へ突出しており、鍔状を呈する。高台の内外面には轆轤回転ナデ調整が施されている。鍔状をなす上面の箇所には一部に自然釉がかかる。色調は灰色を呈する。胎土は直径 1 mm 以下の白色・黒色砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は良好であるが、器面には随所に剥離や欠損が見られる。

9 は、第 2 地区第 2 層から出土した須恵器で、壺または甕の頸部から胴部の破片である。外面には右上がりの平行タタキの後に轆轤回転ナデ調整が施されている。内面にはカキ目調整が施されている。色調は内外側ともに灰色を呈する。胎土は直径 2 mm 以下の白色砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は良好である。

10 は、第 1 地区第 12 層から出土した須恵器の胴部破片である。外面には平行タタキ目、ま



第22図 出土遺物（1～20は縮尺1/3、21・22は縮尺1/2）

た内面には同心円状の当て具痕が見られる。色調は内外面ともに青灰色を呈する。胎土は緻密で、焼成は良好である。

11は、第2地区の溝埋土第7層から出土した須恵器で、壺または甕の胴部破片である。外面には平行タタキの後にカキ目調整が施されている。内面には同心円状の当て具痕が見られ、一部に斜め縦方向へのヘラ状工具によるナデ調整が当て具痕の上に施されている。色調は青灰色を呈する。胎土は直径2mm以下の白色砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は良好である。

12は、同じく第1地区第12層から出土した須恵器の胴部破片である。外面には平行タタキの後にカキ目調整が施されている。内面には同心円状の当て具痕が見られる。色調は内外面ともに青灰色を呈する。胎土は直径1mmの砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は良好である。

13も、同じく第1地区第12層から出土した須恵器の胴部破片である。外面には平行タタキ目、また内面には同心円状の当て具痕が見られる。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は緻密で、焼成は良好である。

14は、第5地区表土から出土した土師器杯または碗の底部である。底径は約6cmを測る。底部外面には回転糸切り痕が見られる。底部内面にはナデ調整が施されている。色調は外面が灰黄橙色、内面が黄橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

15は、第1地区第14層から出土した土師器の底部付近と考えられる破片である。外面は上半部が剥離している。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。胎土は直径2mm以下の砂粒がわずかに含まれる程度で、緻密である。焼成は良好である。

16は、第1地区第10層から出土した土師器の胴部破片である。外面にはハケ状工具による横方向と斜め方向の調整痕が見られる。内面は剥離している。色調は外面が明黄橙色を呈する。胎土は直径1~2mmの砂粒がわずかに含まれる程度で、概ね緻密である。焼成は良好である。

17は、第1地区第10層から出土した土師器の胴部破片である。摩耗が激しいが、外面にはかすかにハケ目が認められる。色調は外面が灰黄橙色、内面が灰褐色を呈する。胎土には1~2mmの砂粒が含まれる。焼成は良好である。

18は、第5地区第5層から出土した陶器の口縁部破片である。外面には口縁部の下位に弱い段が見られる。内外面には灰白色の釉が施されている。断面の色調は浅灰黄色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

19は、第5地区の溝埋土第8層から出土した陶器の胴部破片である。内外面とも白色釉の地に、暗オリーブ色の釉が縦方向へ施されている。断面の色調は灰白色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

20は、第5地区第2層から出土した陶器擂り鉢の口縁部破片である。口径は約34cmである。内面には御目が見られる。内外面ともに轆轤回転ナデ調整が施されている。また、内外面ともに黒褐色の釉がかかる。断面の色調は浅黄橙色を呈する。胎土は直径1mm以下の砂粒がわずかに含まれる程度で、緻密である。焼成は良好である。

21は、第4-2地区第3層から出土した鉄製の角釘である。全長は約6.2cmである。頭部長は約0.8cm、頭部幅は約1.5cm、茎部の厚さは約0.5cmを測る。茎部の中位からやや下の所に

おいて、約30度の角度で折れ曲がっている。鋸による腐食が著しい。

22は、同じく第4-2地区第3層から出土した滑石製の石筆片である。現存長は3.2cm、直徑は0.5cmを測る。表面には縦方向に複数の筋や弱い稜が入り、またそれらの間には横方向の細かな研磨痕が認められる。これらは製作時の加工痕と判断される。色調は緑灰色を呈する。

(岡山充味・菅野友希・小林史佳・藤井奎臣・吉田皓・高橋浩二)

注

- (1) 壺の頸部として図化したが、あるいは実測図の上下を反転して、二重口縁壺の口縁部下半から頸部上半にかけてのものかもしれない。この場合、突帯とした部分は、二重口縁部の段下端を形作るものとなる。

第6章　まとめ

今回の調査では、南側突出部及び周溝を確認し、合わせてそれらの形状や規模を明らかにすることを目的に発掘を行った。これまでの記述をもとに、第2次調査の成果は次の諸点にまとめることができる。なお、第23図は各調査地区の平面図を合成したものである。

1. 第1地区では、調査区の南側において溝状遺構を検出した。溝状遺構の南部は調査区外にあたるため未詳だが、北側斜面は2段の構造をなすことから、溝状遺構の上半部を上段、下半部を下段とそれぞれ呼称する。調査区内において、上段部分は幅2.1～2.45m、下段部分は幅0.85～1.1mである。上段部分と下段部分との間には、上段部分の底面にあたる幅約0.6mの平坦面（検出面の標高は51.885～51.920m）が見られる。また、調査区の中央から北側においては、地山面が広い平坦面となっている状況を確認した。

2. 第2地区では、杉谷4号墳の築造以降に、墳丘裾部周辺を東西方向へ横切る形で構築された溝を検出した。確認された溝の最深部は、東端で標高52.108m、中央部（第13図A-A'断面の箇所）で標高51.915mを測り、西側へいくにしたがい徐々に深くなる。第4-1～4地区、そして第1地区北側からは、この溝の南側斜面が検出されており、溝の長さは12.2m以上、幅は1.8m以上となる。だが、北半部は調査区外にあたるため、溝の正確な深さや規模、形状等を明らかにするには至らなかった。

3. 第3地区では、調査区の東側から西側へ約5度の角度で傾斜する地山の平坦面が確認された。これにより、地山の平坦面が第1地区の方向へ緩やかに下降していることがわかった。

4. 第4-1地区、第4-2地区、第4-3地区、第4-4地区では、上述のように、杉谷4号墳裾部周辺に構築された東西方向に走向する溝の南側斜面を検出した。

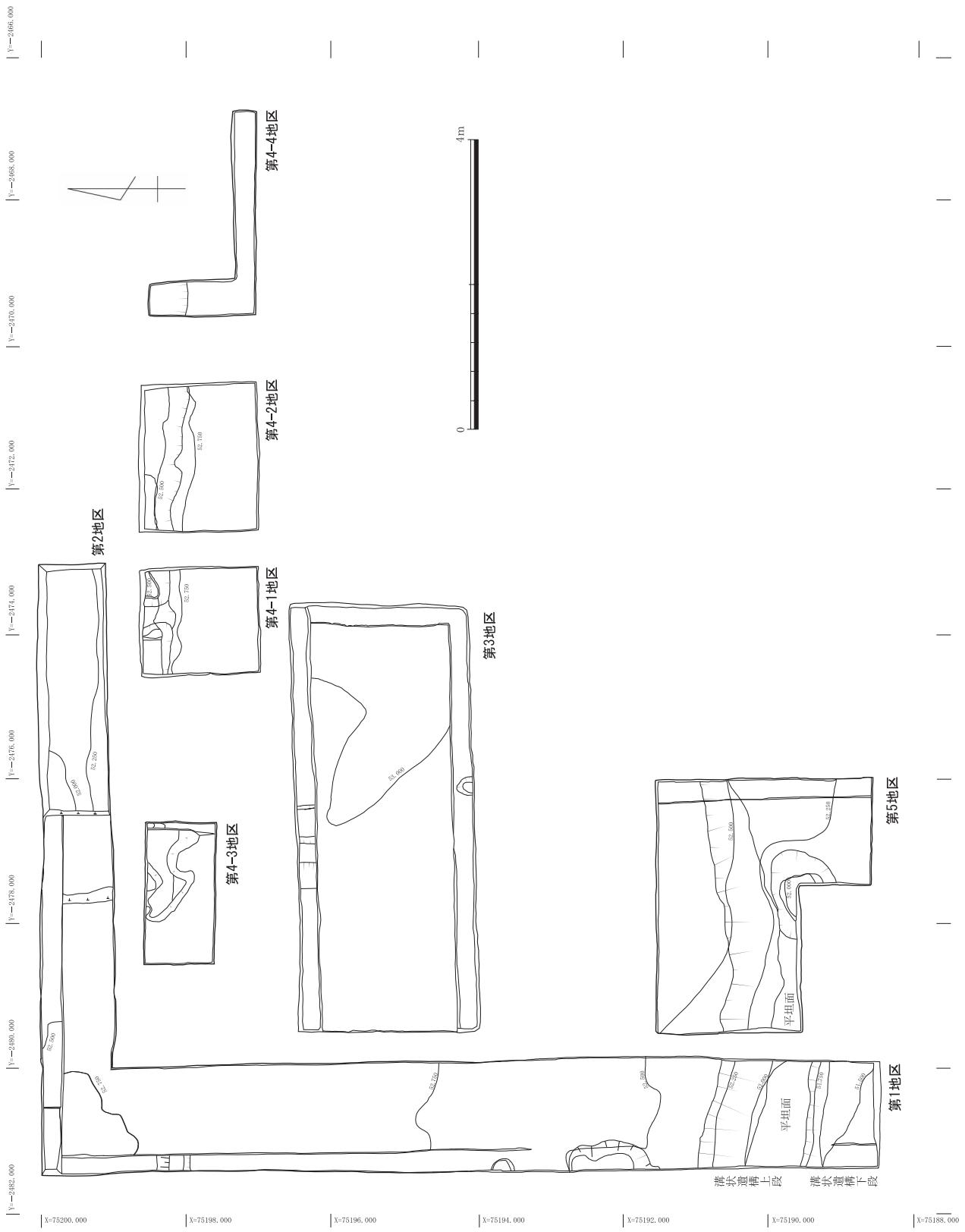
5. 第5地区では、溝状遺構（上段部分）とその下端に伴う平坦面（検出面の標高は52.049～52.085m）を検出した。この結果、溝状遺構上段部分は緩やかな弧状の平面形を呈すること、平坦面（溝状遺構上段部分底面）は第1地区の方向へ緩やかに下降していることがわかった。また、溝状遺構下段部分は第5地区の範囲には続かないことなどが明らかになった。

6. 第1地区における溝状遺構は2段構造をなすが、富山市教育委員会が1974年に発掘した北側突出部・北西側墳裾部・北西側墳裾部の周溝、また富山大学考古学研究室が第1次調査で検出した東側突出部の周溝は1段構造であり、様相を異にしている。第1地区、第5地区検出の溝状遺構は、南部が未調査で、正確な深さや規模、形状等は未詳であり、杉谷4号墳との関係性もまた不明確である。さらにまた、第2地区や第3地区、第4-1～4地区において、突出部の側面を巡る周溝は検出されなかった。このように、今回の調査においては、南側突出部に伴う周溝などの遺構を確認するには至らなかった。

7. 杉谷4号墳の築造時期を推定させる土器資料としては、月影式から白江式（弥生時代終末期または古墳時代前期初頭に比定される）に属すると考えられる大形壺（第22図-1）がある。

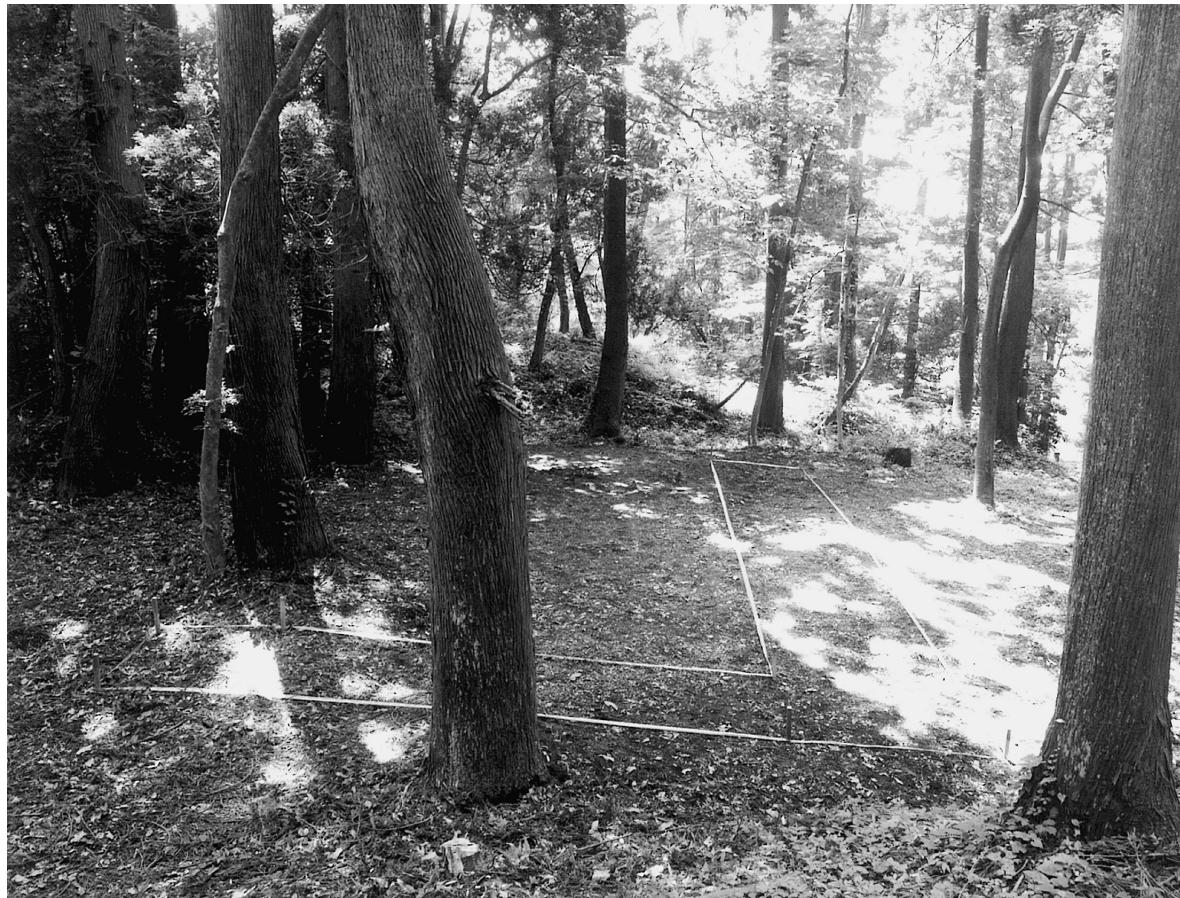
杉谷4号墳は、北陸における四隅突出型墳丘墓をはじめとする弥生時代墳墓、また杉谷古墳群の出現や変遷を考える上で重要な資料であり、今後ともさらなる調査をすすめるとともに、学術的な意義を明らかにしたい。

（高橋浩二）



第23図 第1～5地区調査区平面図（縮尺1/80）

図 版



1 第1地区・第2地区設定状況（手前は第2地区、北から）



2 同上（手前は第2地区、北東から）



3 調査区完掘状況（南西から）



4 同上（東から）



5 第1地区・第5地区完掘状況（北西から）



6 同上（西から）



8 第1地区溝状遺構断面（西から）



7 第1地区北側の溝断面（南東から）



9 同上（東から）



10 第1地区完掘状況（南から）



11 第2地区完掘状況（東から）



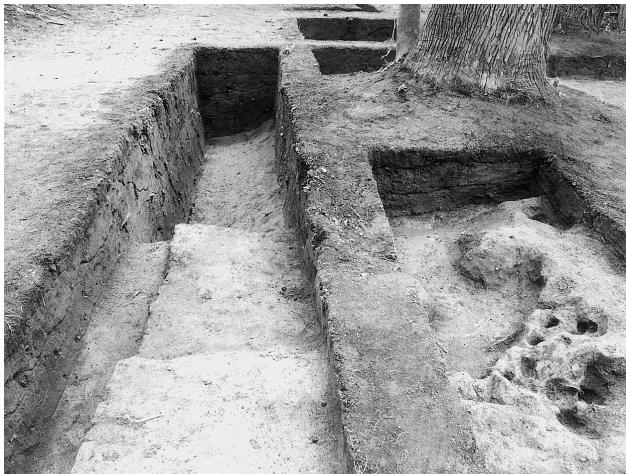
12 第1地区・第2地区・第3地区完掘状況（南西から）



13 第2地区A-A'断面（東から）



14 第2地区北側断面（南東から）



15 第2地区・第4-3地区完掘状況（西から）



16 同左（東から）



17 第4-3地区完掘状況（南から）



18 第4-2地区完掘状況（東から）

写真図版
6



19 第4-1地区完掘状況（南から）



20 第4-1地区北側断面第9層土器検出状況（南から）



21 第4-1地区・第4-3地区・第4-4地区完掘状況
(手前は第4-4地区、東から)



22 第4-4地区完掘状況（南西から）



23 第3地区完掘状況（北東から）



24 第5地区完掘状況（北東から）



25 第5地区溝状遺構（北東から）



26 同左（東から）



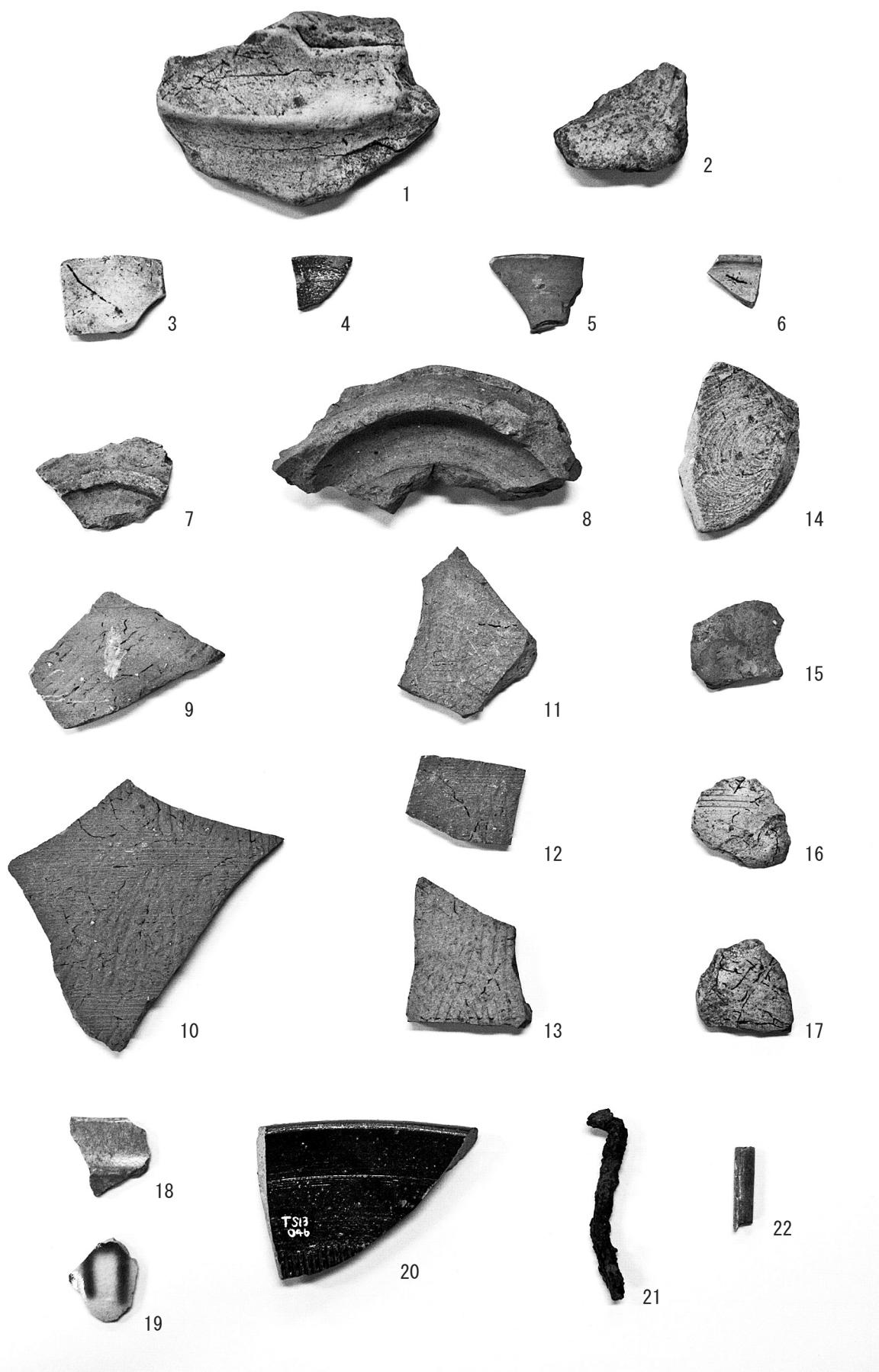
27 第5地区西側断面（東から）



28 第5地区東側断面（西から）



29 杉谷4号墳南側突出部周辺の状況（南東から）



ふりがな	すぎたに 4 ごうふん -だい 2 じはつくつちょうさ ほうこくしょ -				
書名	杉谷4号墳－第2次発掘調査報告書－				
副書名					
卷次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	高橋浩二(編)、次山淳、金田朋子、小谷望有季、岡山充味、菅野友希、小林史佳、藤井奎臣、吉田皓				
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室				
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL 076 (445) 6195				
発行年月日	2015年2月27日				
ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積
すぎたに 4 ごうふん 杉 谷 4 号 墳	富山市	36度 40分 40秒	137度 8 分 19秒	20130729 ～20130830	57.14m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉谷4号墳	墳墓・古墳	弥生～古墳	四隅突出型墳丘墓	弥生土器・ 土師器、須 恵器、陶器、 鉄釘、石筆	四隅突出型墳丘墓で ある富山市杉谷4号墳 の発掘調査を実施した。 今回の調査では南側突 出部及び周溝の確認を 主な目的として発掘を行 ったが、検出するには至 らなかった。墳丘の周辺から性格未詳の 溝状遺構が検出された。 杉谷4号墳の築造時期 を推定させる土器資料 として大形壺片が出土 したが、杉谷4号墳の 具体的な築造時期を明 らかにするには至らな かった。

2015年2月20日印刷

2015年2月27日発行

杉谷4号墳

－第2次発掘調査報告書－

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室

〒930-8555 富山県富山市五福3190

TEL 076-445-6195

印 刷 株式会社 チューエツ